

1・彷徨^{さまよ}う幼女

夜の通りに、私は一人立っている。

通りと言つても、私が立っているところに人の姿はほとんど無い。

細いこの通りは大通りに繋がっていて、そちらは沢山の人々が行き来する繁華街。また反対側へ進めば、繁華街ほど人はいないがここよりはまだ人の多い通りに出る。ただそちらは、ほとんどが男女二人連ればかり。道々、二時間だけ部屋を貸し与える「宿」が立ち並び、そんな通り。

私が立つこの通りは、大通りからその宿々へと繋がる裏道。煌びやかな繁華街のような明かりはもちろん、ホテル街特有と言える看板の明かりすら無い。ここには双方の明かりがどうにか届くという、そんな薄暗い裏道。

普通ならこんな裏道、誰も通らない。宿に行く道はいくつもあり、わざわざ細く暗いこの道を選んで行かない。カップル達にしても、こんな道を通つてしまえば盛り上がった気分も萎えてしまうというもの。

それでもたまに、この道にわざわざ足を踏み入れる人がいる。

「お嬢ちゃん……こんな所にいると、あぶないよ？」

優しく、私に声をかける大人。男の人だ。有り体な、何処にでもいるようなサラリーマン風の男。

優しく？ 違うわね。けして優しくなんかは無い。私には解る。

「ここに立っていると、気持ちいいことをしてくれる人が来るって聞いたけど……おじさんは違うの？」

男の顔が、驚きと、そして期待に満ちあふれ、口元はニヤリとつり上がっていく。

まさかこんな子供が……しかしここに立っているということは……最初に声をかけた時の、この男が考えた心境。たぶん間違っていない。少なくとも私の言葉を聞いた瞬間の、あの顔。あの顔からは間違っていないと判断出来る。

そう、ここは時折援交目的の女性が客待ちすると言われている通り。本来ならもつと明るいところで堂々と客待ちをするものだが、最近は警官の見回りが厳しくなっただけでなくヤクザの介入もあつたりして表通りではやり辛い。「もぐり」で援交する私なんかには、噂の広がったこの手の通りを点々とする方が客が捕まりやすい。

客？ 違うわね。少なくとも、私にとって相手は客ではない。

「驚いたな……キミ、いくつなんだい？ 大丈夫なの？」

何が「大丈夫」なのか、そこを尋ねるのは野暮。

「いいじゃない。それより、おじさんは気持ちいい事してくれないの？」

年齢を答えるのも野暮。私はぐつと男の腕を両手で掴み、抱きしめるように引き寄せる。まるで無邪気な少女のように。まあ、客観的に見れば私の行動は年相応の態度に見えるだ

ろう。

ここでの会話は、極力必要外のことを話すべきではない。何故ならば、もし何かあった時に「知らなかった」で押し通せるから。

それに……「本当の」年齢を聞いたって、信じはしないから。

重要なのは、この男が私を自分の好みに応じた年齢へ勝手に当てはめてくれる事。そして私は間違いなく、この男にとって好みの年齢と思われる外見をしている。

ロリコン。男の好みを一言で言えば、それ。

黒いフリルの付いた、いわゆる「ゴスロリ」と呼ばれるに近い幼児服を身にまとい、長い黒髪をツインテールに結んでいる。どこからどう見てもその手の趣味を持つ男性に「うけ」が良い格好だ。唯一唇が真っ赤なところは年相応とは見えないが、そこはむしろエロティシズムを刺激するワンポイントだと私は自己解釈している。

私の、ほんの僅かだけ膨らんだ胸を腕にぐいぐいと押し当てられ、男は鼻の下をだらしなく伸ばしきっている。

「そうか、じゃあおじさんが良い所へ連れて行ってあげるよ」

ちよろい。ちよつと古くさい言葉を脳裏に浮かべ、私は心中で舌を出す。

ここは狩り場。

この細い通りは、大通りから時折折れ込んでくる「ネギを背負った鴨」を手慣れた「猟師」が捕獲する、狩り場。私は見事、一匹の鴨を捕獲することが出来た。後は、どう美味しく「食べさせる」か。それだけ。

私は男に連れられ、「良い所」の並ぶ通りへとつま先を向けた。

日本は私にとって、とても住み心地の良い国。何故なら、この国は私のような「年端もいかぬ幼女」を愛でる大人が多いから。むしろこの国でも、未成年者に対する性行為は御法度。それでも、様々な形で幼女を愛でる大人は絶えない。

国民性なのかどうか、難しいことは私には解らないが、モンゴルからわざわざやってきただけの「報酬」を、この国の男達は私に与えてくれる。

そう、私はモンゴル出身。ロシア側に近いブリヤート人の住む地区で生まれた。とはいえ、そこを故郷だと思ったことは一度もなく、日本に来たのも出稼ぎではなく移住に近い。私にとっては、ただ「獲物」が多い狩り場へと拠点を移したに過ぎない。日本という国が、私にとって最良の狩り場だという、ただそれだけの事。

「ね、一緒にお風呂入る」

私を宿へと連れ込んだだけで既に興奮している男に、私は部屋へ入るなり風呂へと誘った。

経験上、幼女を愛でる男達は女性をリードするのが苦手だということを、私は知っている。もちろん中には女性の扱いが上手い男もいるが、しかし私から誘った方が「効果」があるのは変わらない。それに私は女性と呼ばれるほど大人とは思われていない。幼い女の子を大人の男が扱うのは、それだけで十分に難しいものだろう。

可愛らしく、かつ、大胆に。

幼女を好む男達が求める、理想像。それを私は出来る限り演じてみせる。

「うっ、うん。そうだね。ちゃんとキレイキレイしようか」

私を何歳だと思っているのやら。一步間違えれば赤ちゃん言葉になりそうな甘ったるい言葉で、男は私の提案に賛同した。

私は軽くはしゃぎながら、脱衣場へと駆ける。男よりも先に服を脱ぎ、風呂場へと入る為。着替えているところを見せてやっても良いのだが、私は自分の「脚本」通りに男を誘導する為、先に入る必要があった。手早く服を脱ぎ脱衣場に置かれたかごへ入れる。そして下着も脱ぎ、こちらは少しかこの縁に引掛かけていれる。

わざとらしいくらいに、下着が目立つように。

案の定、遅れて脱衣場に来た男は、私の「畏」にかかる。風呂場の中から扉の曇りガラス越しに見ても解る。男が私の下着を手を取っている。そして少し広げてみたり顔に近づけてみたりと、定番の行動。男が徐々に気分を高めている間、私は湯を溜めながら石けんを泡立てる。

「遅いよお、何してたの？」

解っていないながら、私は少しすねてみせる。男はゴメンゴメンと謝りながら、チラチラと私の身体を見ている。私は石鹸の泡で、胸や腰を隠している。すぐに全ては見せない。チラリズム……などと言うそうだけれど、私は言葉こそ知っていてもその真理状況はよく解らない。ただ、男の食いつきが変わるのを経験上で知り得ているだけ。

「ね、背中洗ってよ」

よく泡だったスポンジを、ハイと男の前に突き出す。男がそれを受け取ったのを確認すると、私はすぐにクルリと背を向けた。じつくりと見せる隙は与えない。それもあるが、男に「チャンス」を与える「口実」にもなる。

有り体に言えば、誘っている。

しばらくは大人しく、背中を洗う男。小さい背中も、もう十分に洗われている。それでも私は、男の手を止めさせない。もうほとんど動きの無い手は、男の迷いを象徴しているから。

「……あん！ もう、どこ触ってるのよお」

「ごめんごめん。手が滑っちゃった」

わざとらしい謝罪をしながらも、男の手は「滑った」まま、私の胸を鷲掴みにしている。鷲掴みとは少々表現が大げさかもしれない。私の胸は、掴む程膨らんではないから。男の手は、そのまま私の胸を軽く揉みだす。しばらくしてその手は胸から軽く離れ、小さなふくらみの中でも、特に突き出た二つの突起を、指の先で軽くくすぐるようになって回す。

「んっ……そこ、気持ちいい」

ただ指先を軽く揺するだけ。テクニクとしてはそう上手いものではない。それでも私は、声を出し快楽を楽しむ。テクニクが低級でも、気持ちいい刺激になっているのは間違いないのだから、何も無い状況で演技をするよりはやりやすい。

「いいよ……感じちゃう」

気を良くしたのか、しつこいくらいに続く、単調な攻め。さすがに同じ事ばかりが続くのも、飽きる。刺激はあるが、徐々に快楽からは遠のいてしまう。さてどうするか。もう「次」に進んで欲しいのだが、それをおねだりして良いのかどうか。甘えるおねだりは効果がある。それは解っているが、遣いどころを間違えると落ち込ませてしまうこともある。

今の場合、テクニクの無さを指摘することになりはしないかと判断に悩む。

「ちよっ……やん！　そこ……はっ！」

こちらの危惧をよそに、男は「次」へと進んでくれた。片方の手が、胸から離れ下へと伸びた。産毛も生えぬ、女性の秘所へと伸びた手。胸同様に僅かだけ盛り上がったその秘所を、その手がなで回す。手が触れたのを感じた瞬間、私は大げさに背を反った。

「はぁ……あん！　いいよ……」

手で軽くなで続けた男はその手を止め、中指だけを軽く動かす。秘所の中心。指が軽く埋まりそうな割れ目を、奥の方からゆっくりと、なで上げる。

「そこ、そこ！　すごい、感じるよぉ！」

なで上げた指が、突起に当たる。未だに胸の突起をいじり続けている指同様、秘所の突起も軽く、しかし細かく、震えるように撫でる。

「はぁ……んっ、お兄ちゃんばかりずるいい。私もぉ」

初めて言った、私の「お兄ちゃん」という単語に反応する男。軽い戸惑いと興奮の隙をつき、私はクルリと男の背に回った。

「えへへ。なんだか、お兄ちゃんって呼びたくなかったの。いや？」

男の攻めから逃れた私の行為に疑問を感じさせる前に、「お兄ちゃん」と甘えてその疑問を反らさせる。男はむろん、お兄ちゃんと呼ばれることに抵抗はない。むしろ望んでいた。おじさんと呼ばれるよりお兄ちゃんと呼ばれる方が嬉しいのは当たり前だろうし、なにより、幼女から率先して呼ばれるなら男にとって至福となる。

正直、どうしてそこまで名称にこだわるのかはよく解らない。なんでも、日本語で「萌え」という言葉がありそれに該当するらしいのだが、モンゴルには無い感覚。理解しづらいが、しかし効果は絶大なので私はこの手をよく使っている。

「ありがとう」

軽く頬にキス。

「じゃ、背中洗ってくれたお礼。お兄ちゃんだって、気持ち良くならなきゃダメだよ」

泡だらけの身体を、男の背中に密着させる。

「んっ……どう？」

身体を上下させ、全身で背中を洗う。さしてふくらみの無い胸では、男としても感触による快樂はあまり望めない。しかし幼女が自分の為に、懸命に身体を使い奉仕しているという行為が、精神に快樂を与えていく。

「そしてこれは、さっきのお返し」

イタズラっぽく言いだし、私は短い腕を懸命に下へと伸ばす。背中越しからでは、手が届かない。それを「演出」した後に、私はすこし身体をずらして片腕だけを男の秘所へと伸ばす。

「すごい……熱くつておつきい」

掴んだ肉棒は、片手では納まらない。だが私の手は幼女の手。納まらなくて当然。もし私が成人の身体をしていたら納まったかもしれない。

「どう？　お兄ちゃん」

ただ闇雲に、握った物を上下に擦り上げる。テクニクとしては男の事を言えるほど上手い物ではない。だがここで手慣れた技を見せては、むしろ男に疑心を生ませてしまう。

そもそもあの通りで獲物を待つていたような女なのだから、手慣れていて不思議はないが、それでも「不慣れながら一生懸命な妹」を演出した方が喜ばれる。幼女を買っておいて純情を求めるのもおかしい話だが、それが「男の夢」「萌え」というものらしい。

時折、どうしても人間の考えることで理解出来ないものがある。理屈ではない、と言う人間もいたが、ならなおのこと私では理解出来ない。それは、私が「愛」を知らないからだという人間もいた。「男の夢」や「萌え」も「愛」なのか？ どうも違う気がする。ただ、自分の欲望を具現化しようとしているだけではないか。そう私は認識しているからこそ、演出しやすいしそれが的を射ていると確信している。事実、今私に快樂の棒を擦られている男は、たいしたテクニクでもないのに至福の表情を浮かべているではないか。

「もっ、もういいよ……充分だから」

うわずつた声で、男が私の奉仕を止める。だが何処まで本気なのか、言葉だけでまだ私の行為を止めようと動いてはいない。

「じゃ、続きはベッドでね」

私はあつさりと手を放す。代わりに、また頬に軽くキス。体も心も、高ぶらせたまま寸止め。自分で言い出したこととはいえこれは男にとって辛い状況。その辛さは、ベッドでの行為に繋がっていくはず。男の心から理性をはぎ取り野生を引き出すには良い。

溜めてあつた湯船を桶ですくい、さっと身体の泡を流す。そして来た時同様素早く風呂場を出る。もちろんこれも、男を定めたレールに乗せる為の誘導演出。

バスタオルを身体に巻き、私はベッドに腰掛けている。大人用のバスタオルは幼女の身体を持った私には大きく、胸や腰だけでなく脚までも隠すのに充分だった。

私はちょこんとベッドの縁に腰掛け、待ちきれない子供が暇を持て余すかのように足をばたつかせて男を待つ。脚を隠すバスタオルも、脚を動かすことでチラチラと見え隠れする。男の視線は、無邪気な幼女の姿と、その幼女が時折見せつける生足に釘付けられているはず。先ほどまではほとんど全裸という格好で、しかも身体を弄もてあそび弄ばれたばかりだというのに、ちらりとしか見えない生足にまた興奮している。

風呂場からずつといきり立たせていた肉棒が、衰えることなく熱を持ち続けている。それは男の腰に巻かれたバスタオル越しにでも良く解る。息も荒げに、男はつかつかとこちらへと迫ってきた。

「きゃっ！ ちょっ……もう、お兄ちゃん！」

いきなり、男は私の両肩を掴むと、そのまま押し倒した。それだけ、男の興奮は頂点に達し理性が効かなくなっているという事だろう。私はこれまでの誘導が上手くいつていることに胸の内ではくそ笑みながら、表では抗議の声を上げた。

「あつ、んっ……んん……」

抗議は上げさせないとばかりに、男は顔をぶつけるのかというほど勢いよく私の唇にむしゃぶりついた。のしかかったまま、小さく華奢な私の身体をぐっと抱きしめる男は、ただ無我夢中で唇を押しつけ舌を私の口内へと押し込む。それこそ息をするのも忘れるかのように。

風呂場での行為で解っていたが、やはり男にテクニクは皆無。快樂を得ると言うより

は、興奮を消化しようとしているようだ。

「ん……やつ、痛いよ、お兄ちゃん……」

どうにか一瞬唇が離れた隙をつき、私は首をイヤイヤと横に振りながら再び抗議を始めた。

「あつ……ごっ、ごめんね……」

痛い、という言葉に我を取り戻したのか、男はキツク身体を締め上げていた腕をほどき、慌てて上半身を起こした。

「もう……優しくしてよ、お兄ちゃん。ね？」

私は自分から、バスタオルを緩め、ゆっくりと広げた。露あらわになる、私の身体。男の呼吸がハアハアとますます荒くなっていく。その荒い息は、ゆっくりと下ろされた頭によって、胸へとかけられる。息に次いで、今度は湿ったなま暖かい舌が、胸に当てられる。

「あつ……」

私は軽く声を上げ、ピクリと身体を震わせた。一瞬男は、私の反応に驚き軽く顔を上げてこちらをのぞき見た。先ほどまでの荒々しい行為に対し優しくしてと抗議した私へ、気を使っているのだ。

いや、もう少し言えば、怯えているのだ。私に嫌われやしないかと。

臆病な男だ。私は思った。

これまでの行為を考えても、この男は女性に臆病なのがよく解る。だからこそ、自信の無い攻めも変化を付けられず、単調になる。そこまで臆病だからこそ、大人の女性は相手に出来ず相手にされないのだろう。そうやって、幼女を愛でる事へ逃避するのか……その過程に、私は興味など無い。だがそんな私でも、これくらいは安易に想像出来てしまう。むろん安易に想像出来る単純さが男という生き物なのだろうし、私にとって扱いやすくりやすいのだから何も問題はない。

さて、その扱いやすい男を、次へと進めさせなければ。私は不安げな男につこりと微笑んだ。私の笑顔に気をよくしたのか、男は舌先だけでなく唇ごと胸に押しつけ愛撫を始めた。チュパチュパと音を立てながら乳房に吸い付き、舌で何度も乳頭をなめ回す。

「あは……んっ、気持ちいいよ……」

未熟だとしても、吸われ舐め回されれば私にも少しは快楽が訪れる。人間の幼女ならば、まだ未発達達の身体を舐められても、くすぐりたいと感じる事はあっても快楽は得られないだろう。しかし私は、そんなごく普通の幼女ではない。人間の熟女並みに、私の身体は快楽を敏感に感知出来る。幼い身体に、熟女並みの反応。自分で言うのもおかしい話だけど、幼女好きの人間にとって私の身体はまさに理想の身体だろう。それを味わえるのだから、この男は幸せだ。

少なくとも、今は。

「ねえ……お兄ちゃんのも、舐めさせてえ」

甘えるように私はねだる。このままでは、また風呂場の時のように単調な攻めが続くだけになる。ならばそろそろ、私から攻めても問題ないだろう。興奮しきった男の頭では、幼女からの淫みだらな甘えも極々自然の行為だと錯覚してくれるだろうから。いや、幼女を愛でる思考の持ち主は、未経験の幼女でも淫らに甘えてくるものだ。既に錯覚しているのかもしれない。何にせよ、私からの奉仕提案に男は気を良くし、股を開き間抜けな姿を私の

前にさらした。私はちょこちょことうように男の股間にじり寄り、ペロリと熱した棒を一舐めする。

「うっ」

男は軽く呻いた。まるでこれだけで達してしまうのかという勢いすら、短い呻きには含まれている。私は舌から男の顔を見上げ、微笑む。そして「あーん」とわざとらしく声を上げ、小さな口を精一杯広げる。なま暖かい感触が、口内に広がる。私は唇でカリを軽く啜え、ゆっくり顔を下げる。唇が棒の先端にまで達したところで、私は動きを止め、今度は反対に顔を押し込んでいく。けして唇を棒から離さない。そして啜えきれない肉棒の腹は小さな手で掴み、激しく擦る。上部のゆっくりとした感触と、下部の激しい摩擦。加えて時折舌で鈴口を軽く舐めたりもする。顔は出来るだけ上に上げ、上目遣いで男の顔をじつと眺め続ける。

もはや、幼女のテクニクではない。しかし興奮しきった男がそんな事に疑問など持つはずがない。

「んちゅ……美味しい……くちゅ……ちゅパツ」

味覚的にはさして美味しい物ではないが、「美味しい」と言えば喜ぶので言っている。ただ、人間の女性は本当に「美味しい」と思えることもあるらしい。そんな話を聞いたことがある。味覚的に美味しいのではなく、感情で美味しいと感じる。そういうものらしい。そこには、奉仕するという「行為」に対して感じる様々な感情と、奉仕したいと「思う」様々な感情によって美味しいと感じるらしいのだが……やはり、そこにも「愛」という要素は絡むらしい。

ならば、私はその感情や味覚を理解することはおそらく無いだろう。私にとって大切なのは、美味しい美味しいとしゃぶれば男が喜ぶ、という事だけ。

「うっ……もう、あつ、くう……」

ドクドクと、熱く粘っこい液体が、口内に流れ込む。少々早い、まあ最初はこんなものか。私は男の放った白濁液を口いっぱい溜め込みながら、舌先で液体が流れ出る「出口」をツンツンと刺激し、最後まで出し切るように促す。出きったところで私は口を肉棒から離し、零れないようにしながら軽く口を開け、中を男に見せる。それから私は喉を鳴らしてその白濁液をゴクリと飲み込む。

「んっ……あは、美味しい……」

僅かに口元からたれてしまっている液体を指ですくい、それを指ごとちゅパツと音を立て舐める。その様子をじつと見つめていた男、彼の一度は萎しなびたはずの肉棒が、熱さと堅さをもう取り戻している。私はそれをじつと見つめ、満面の笑みを浮かべ男の顔へと視線を移す。

「ね、お兄ちゃん。今度はこつちのお口で……ほら、お兄ちゃんの舐めてたら我慢出来なくなっちゃった」

小さな脚を懸命に広げ、私は秘所を男の前に晒す。そこはねっとり湿っており、私は指でその湿った秘所を更に押し広げ、よく男に見せた。虫を誘う為に蜜を出す花のように、私の秘所はすぐに愛液で溢れるように出来ている。

淫乱な幼女。人間ではあり得ないシチュエーションに、男は酔いしれている。誘われるままに男はふらふらと私に近づき、いきり起った熱棒を私の淫唇に押し当てる。

「ああ！ んっ、いい！」

一気に挿入される熱棒。男は入れた直後こそ腰を押し入れたまま動かなかったが、動き始めてからは、壊れた電動人形のようにひたすら腰を動かした。

その行為に、思いやりはない。男根をねじ込まれた膣はとても小さく、入れただけで破け壊れてしまいそうだった。それでも、ぐっと締め付けながら生暖かい感触を与える膣の快楽に我慢出来ず、ただ闇雲に腰を動かしている。

もちろん、私はそんな野獣と化した男の猛威を受け入れられる身体を持っている。むしろ私には、これほどに荒々しく腰を動かされた方が快楽を得やすい。ここまで、感情を高ぶらせるだけ高ぶらせた甲斐があったというもの。

「いつ、はっ、おにいっ、ちゃん……きもち、いい、いい！」

血走った目が、男に正気など失われている事を物語っている。深く激しく、腰を動かし続ける男。肩で息をしながら両腕で私の腰を抱え、更に奥へ奥へと突き入れようと必至になっっている。

「あっ、やっ、出てる……お兄ちゃんの出てる……」

不意に、熱い物が膣の奥へと流れ込んできた。あまりの激しさに、男は頂点に達しようとしていたことすら気付かなかったのか。腰の動きを止め、男は軽く呻いている。むろん、私は達していない。これで満足出来るはずがない。

「いやぁ、お兄ちゃん止めちゃ嫌ぁ」

私は下から、懸命に腰を振る。同時に、膣に力を込め男の肉棒を更に締めつける。今日はまだ二度も達した男だったが、すぐに男根は膣を内側から壊そうかという程に、一気に膨張を始め固くなった。

「今度はぁ、私がぁ、ああ！ うっ、上になるっ、からぁ！」

理性を失いながらも男は私の要求を理解したのか、後ろへと倒れ込み、繋がったままの私を腰の上に乗せた。

「はっ、あっ、あん、いつ、いい、いい、よぉ……おにいっ、ちゃん……あん！」

途切れ途切れに、私は快楽を言葉にする。何度も腰を男の腰に打ち付け、そそり起っている肉棒を奥へと突き当てようとする。

小さい私の身体に合わせ、膣の奥も浅い。それだけに男の肉棒は簡単に奥に届くばかりか、強く突き当たる。子宮に当たるその衝撃は、私にも男にも快楽へと変わる。

「どっ、おにいちゃ、ん……きもち、いい？」

気持ち良いはずだ。私には自身がある。案の定、男は硬骨の表情で譫言うたわごとのように「いい、いい」を繰り返すだけ。それしか言葉に出来ないでいる。

「嬉し……おにいちゃん、感じて、くれてる、んっ、い、んん、おにい、ちゃ、ん、もっ
と、もっ、突いて、突いてえ、ん、あん、んっ！」

もっともっと男を高ぶらせ、私はそこから快楽を得る。むろん演技はしているが、私も性的な悦楽を得て楽しんでいるのも事実。楽しめなければ、ここまでお膳立てした意味がない。

「ん、いつばい、出ちゃう……いやらしい、声、あん、出ちゃうよぉ」

さんざん演技で喘いできた私が今更言うのもおかしい話だ。しかしこれも本心で……演技ではない喘ぎ声が漏れ始めている。それを自覚している今、私は少し恥ずかしささえ感

じ、それがまた軽い快感になっていた。

ギシギシと鳴るベッドに負けぬ喘ぎ声。それを聞き男が興奮するのはもちろん、私も自ら発している声を聞き、自身の感情も高まってきていた。

「来る！ 今度、はっ、いっ、一緒、一緒、にい、ねっ、おに、おにいっ、ちゃん！ 来る、来ちゃう！」

軋むベッドが壊れるのではないか、そう思える程に激しく腰を打ち付け合う二人。トランポリンの上ではしゃぐ子供のように、私は男をまたぎ身体ごと動かし膣の中と相手の肉棒を擦らせる。すり切れるほどに熱く擦れ、その熱さが全身へと駆け上り悦楽へと切り替わる。

「来る！ 逝く！ いいっ、来ちゃう！ いいっ、あっ、あああ！！」

ドクドクと下から流れ込む液体。ヒクヒクと痙攣する肉棒から全てを吸い上げようと、私はキュツと膣を縮める。もたれかかるように、私は男の胸に顔を乗せる。

「はあ……気持ち良かったよ、お兄ちゃん……」

だが、私の甘えた声は男の耳に届いていなかった。激しい行為に、男はまさに精も根も尽きた様子。完全に気を失っていた。

無理もない。大抵の男はこのあたりで気を失う。よほど強靱な肉体と精神を持った男でも、私の手に掛かれれば後一、二回も出せば持たないはずだ。そうなるようにここまであれこれとお膳立てし異常なまでに興奮させてきたのだから。とはいえ、そのお膳立ても順調に事を運ぶための、簡単な下準備でしかない。精子の放出と共に「精気」を吸われているのだから。人間の男なら準備無しでも気絶くらいはする。

「……さてと」

私は身体を起こし、すぐさま男から離れた。

「もうちょっと楽しませてくれて良かったのに。まあいいわ」

私にとつての本番は、むしろこれからだから。それさえ満足させてくれるのなら、不満はない。

幼女の身体がみるみると人の形を崩していく。私は「もう一つの姿」に、今変わっている。長いクチバシと、羽毛に包まれた身体。腕は翼へと変わり、脚はより細くそしては虫類と同等の肌質へと変わる。

私は姿を、鳥に変えた。

こちらが本性、というわけではない。どちらも、私の姿。普段は幼女の姿で生活しているが、これから行うことをする時は鳥の姿になる。それだけの話。

モー・シヨボー。それが私の正体。

母国モンゴルでは「悪しき鳥」という意味。旅人を誘い、隙を突いて脳髓を啜る妖怪。モンゴルという地域や旅人というターゲットを、私は単に日本とそこに住む幼女趣味の男達に替えただけ。ただそれだけのこと。

固く長いクチバシで、私は軽く男の頭を突いた。すぐに起きる気配はない。

やるなら、今。

私は男の頭部に穴を開け、そこから脳髓を吸い尽くす。ここまでの経緯はこのための下準備。固い頭蓋骨も、私のクチバシなら簡単に穴を開けられる。私は狙いを定め、顔を上げクチバシをピッケルのように振り下ろす。

そう……するつもりだった。

「……止めた」

なんとなく、気が変わった。私は再び幼女の姿に戻り、着ていた服を取りに脱衣場へ向かった。男の脳髓を吸い尽くせば、当然男は死亡し、この部屋は殺人事件の現場と化す。そうなれば、当然人間達は騒ぎ始め、犯人である私を捜そうとするだろう。さすがに捕まることがないが、騒ぎが大きくなると「狩り」がし辛くなる。そうなったら場所を変えれば良いだけなのだが、それももう面倒くさい。

なにより……いや、特に言つことを聞く義理も何もないのだが……私に接触してきた「自称保護者」を名乗る男から「殺生は控えてくれ」と懇願こんがんされていたのを不意に思い出し、なんとなく、気がそがれた。今日はそれだけ。特に他意はないはず。

その保護者は、私に人間社会で生活する知恵と知識を与えてくれた。その義理は……全く無いと言いつ切るほど薄情なつもりはないけど……ただその彼が私に、「愛」を教えると懸命になっているのがちょっとウザイ。

「無理よ……」

長いこと、少なくとも幼女の姿から察せられる年齢よりは長く、生きている。その中で、私は「愛」を知りたいとも思わなかったし、理解出来ると思ったこともない。色々この日本で生活するためのサポートをしていてくれるのには感謝しているが、だからといって、あの男の願いを聞き入れる必要は無く……ともかく、今日はもう脳髓を啜る気力が失われた。それだけ。

脳髓は単に好物であり、それを糧としていくわけでもなく死活問題にならないというのも理由の一つではある。三回に分けて得た「精気」だけで、ひとまず事足りているし。

「でも、このまま帰るのもねえ……」

着替え終わった私は、乱雑に衣類が脱ぎ入れられている男のかごに手をかけた。そして中から、私は財布を丸ごと拝借した。

「搾り取るだけ搾り取ってあげるわ」

よもや、私のような幼い少女に財産を奪われるとは思いつただろう。しかし極上の快樂を与えてやったのだから、これくらいは当然の「見返り」だろう。と言っても、私に金銭はあまり必要ないのだが。

「んー……ちよつと物足りないかな。こいつヘタすぎ」

脳髓を吸ったとしても、満足出来ただろうか。私はまだうずく臍に軽く手を添えた。

「もう一人くらい行けるかな」

まだ夜は長い。私は狩り場の「ポイント」へと、戻っていった。

妖怪によって様々だが、私の場合、決まった場所に居を構えているわけではない。よくニューズなどで耳にする「住所不定」という状況。睡眠を取らなくても平気な私には寢床を確保する必要はない、という事だ。

とはいえ、私にも一応帰る場所はある。帰ると言うよりは時折立ち寄ると言った方が正しいか。本来ここへ戻る必要もなければ、勝手に「自称保護者」が私の仮住居と決めたことなんだし。

「お、帰ってたか」

その保護者が、テラスにある白い椅子に腰掛けお茶を嗜たしなんでいる私に話しかけてきた。こちらの許可も求めずコイツは、テーブルを挟んだ向かい側の椅子に腰掛けた。縦にも大きい横にも大きいこの男が座ること、白く可愛らしい椅子が軽く悲鳴を上げた。

「別に悪さはしてないわよ。今のところはね」

訊かれる前に自分から答える。コイツは保護者というより監視員に近い。だからいつでも、私が何か悪さをしていないかと目を光らせている。私が日本にやってきたのをどうやって知ったのか、来てほんの数日後にはこいつから接触してきたほどで……その時に私の保護を申し出、人間社会での生活をサポートすること、その為に自分の屋敷を拠点にして良い等と一方的に約束してきた。その代わり、人間を殺したり……私の場合好物である脳髓を啜るなどの行為を勝手に禁止してきた。最初こそ当然反発したが、コイツの粘り強い説得がうざくなり、結局は私の方から折れる形になってしまったが……ホントうざいけど、コイツのおかげでこの日本で生活していくのがずいぶんと楽になったのも事実。それがとつても癪しゃくなんだけどね。

「その事は心配してないさ。君はとつても良い子だからね」

気持ち悪い。膨らんだ顔を更に笑顔で膨らませている。こんな成りでも、国内はもとより世界各地の妖怪や妖精などの「人外」の者達に慕われているというのだから……その事実が更に気持ち悪いわ。

「はいはい、流石は学者先生ですこと。なーんでもお見通しで」

私はイヤミたっぷり言い放ち、両膝をテーブルに付きながらティーカップを口元に運ぶ。

「先生はよしてくれと言ってるだろ、クラン。俺は妖精フェアリードクターで、先生と呼ばれるほど偉くはないよ」

毎回言われる嫌みに、学者先生は眉をひそめながら抗議する。私はその困り顔を見ながら口元をつり上げた。

今彼が私を呼んだ名前、クラン。一応私はこの名で通しているが、本名ではない。というより、私に名前なんか無い。社会にとけ込んで生活していく上で名無しのままでは不便だからと、この男が勝手に付けた名前なのだが……なんでも、チンギスハーンの物語に登場する女性の名前なんだとか。私がモンゴル出身だからということひねり出した名前らしい。

「でもドクターってこの国では先生なんですよ？」

「英語と日本語の解釈が違うだけだ」

何度も繰り返す説明にうんざりしている様子。そもそも妖精学者フェアリドクターという職種自体この国では彼しかいないし、本場イギリスでも表向きの妖精学者フェアリドクターと裏で活躍する妖精学者フェアリドクターではずいぶんと活動内容が違うし。だからコイツは色んな人や妖怪、妖精達に始めて合う度手慣れた様子で自分の事を話すのだが……私のように、判っていて何度も尋ねられればうんざりもする。まあ、私達にとってはもう挨拶のようなものか。

「で……仕事の方は順調か？ 店長からは良くやってくれていると聞いてるけど」

「まーねー。でもさ、時々職務質問みたいなのをされたりするのがウザイのよね。警察官とかじゃなくても、大丈夫なのとか言ってくる一般客も多いし」

見た目が完全に子供な私が働いている姿を見れば、誰だって疑問に感じて当然だろう。

職場が職場だけに。むしろ誰も疑問に感じなかったら、それはそれで社会的に問題だ。

「さてと……そろそろ、そのお仕事の時間だわ。行ってくる」

「あーいよ、気をつけてな」

大人用の椅子から軽く飛び降り、私は手を振って屋敷から離れていく。そして私は姿を鳥に変え、翼を大きく羽ばたかせ飛び立った。

本来私に、お金は必要ない。だから働く必要もない。それでも働いているのは、それなりの理由があるからだ。

「はい、「愛情卵でふんわり包んだオムライス」ね」

恥ずかしいネーミングを慣れた口調で言いながら、私はそのネーミングにはそぐわない無愛想な態度でオムライスをテーブルの上に置く。それにしても、この名前はどうかにならないものか……まあ、この店が店だけに、むしろこの手の名前でなければならぬのは判っているんだけど。

私が働いているのは、俗に「メイド喫茶」と呼ばれるような店。ただ店員の衣装はメイド服とは限らず、繁盛している店のように過剰なサービスなどは行っていない。実際私が着ているのは着慣れたゴスロリだし、態度もメイドっぽくはない。それでも……まあ、自分で言うのもなんだけど……店員として人気があるらしいのだから、おかしなものだ。ホント、男どもの言う「萌え」のポイントとやらは千差万別だ。

「ありがとー、クランちゃん」

客が愛想良く笑いかける。私はその笑顔に答えるわけでもなく、そそくさと次の料理を運ぶために厨房へと戻る。こんな態度でも客は勝手に私のことを「ツンデレ」とか言う奴に脳内変換して喜び、私としてもこれでウエイトレスとして成立するのだから……私にとつて本当に、楽な仕事だ。むしろ、楽だからこの仕事をしているわけではなく、今の客のように、私のこの容姿と態度を好むという「需要」があるから、店長が私を雇い「供給」しているに過ぎない。それに私がここで働くのはもっと別の、「もう一つの仕事」があるからだし。

「これ、12番テーブルね。それと……「いつもの」お客さんだから」

厨房で待っていたメイド服のホール長が、私に料理と、そして折りたたまれたカードを手渡す。私はトレイを持ちながらカードの中身を確認し、思わず苦笑してしまった。

「アイツか……店には毎日顔を出してるが、「これ」は久しぶりだな」

カードをヒラヒラと振りながら、ホール長にむけて私はまた苦笑い。

「大切な常連さんなんだから、優しくしてあげてね」

「優しくしたら喜ばないよ、アレは」

私の言葉に、今度はホール長が苦笑いを浮かべる。一応ホール長も、アレの「性癖」は今私が持っているカードを見て知っているから。

私はカードをトレイに載せられた料理の下に敷き、指定された12番テーブルへ向かった。「ほれ」

私は「身体まで熱くなっちゃう萌え萌えカレー」という長つたらしい料理名を口にしないまま、テーブルの上へやはり無愛想に置いた。見慣れた客は私を見て、そして料理の下に敷かれたカードを見て、再び私を見つめながら気持ち悪い笑顔を浮かべる。

「いつもありがとう、クランたん」

「なれなれしく「たん」とか呼ばないで」

彼が言った礼は、ウエイトレスである私に向けられたものではなく、もう一つの「仕事」を私が受けたことに対するもの。このことを理解しているのは、この気持ち悪い客と私だけ。周囲にいる「普通の」客には、なんでもないこの店ならではのコミュニケーションに見えているはずだ。

「いつも通りで良いわね？」

コクコクと首を振る常連客。それを見届け、私はウエイトレスとしての仕事を続けるためにまた厨房へと戻っていった。

夜……私はラブホテルの一室にいる。店に来ていた常連客と共に。

あのカードは要するに、このもう一つの仕事……売春のやり取りをする時に用いるカード。私が働いているメイド喫茶は、売春の斡旋あせんも行っているわけだ。とはいえ、むろん普通の売春ではない。あの店、実は店員のほとんどが人間ではなく、様々な人外種族が働いている。そしてウエイトレスのほとんどが私のように夜の客もあの店で取っている。

私にお金はないが、糧として男の精気が必要になる。昨夜のように街を徘徊し餌となる男を捕食する方法もあるが、あまり頻繁に続けると警察などの目が厳しくなる。そこで私は、安全に餌を確保する手段としてあの店で働き、こうして客を取ってその客から糧を得ている。店としても儲かるし、客としても人間相手では得ることの出来ない快楽を得られるのだから、誰にとつても得なことばかり。私達は人間じゃないから「罪」にはならないしね。

ウエイトレスの中には私と同様精気を求める淫魔も多いが、血を求める吸血鬼も多い。そして客は、私達が人間ではないことを知っている。あの学者先生が言うところの、貴重な「協力者」という事になる。そんな彼らがどうやって私達の存在を知ったのかは人によってまちまちらしいが……まあ私に言わせれば、「ここまでたどり着けたほど欲深い」「変態」って事になるかな。事実今日の客だつて、元々は私に狩られた、ただのロリコンだった訳だし。アレにしてみれば、私が妖怪かどうかより自分好みの女を抱けるかどうかの方が重要で……あー、アイツの場合「抱く」って意識はないかもしれない。

「で、一号。今日は何を着て欲しいわけ？」

私はコイツを普段「一号」と呼んでいる。もっと正確に言えば奴隷一号。まあ、意味はその言葉通りだ。こう呼ばれること自体が既にプレイであり、すなわちこれは本人の希望でもある。

私の問いかけに、一号は持参した紙袋を手渡してきた。それを受け取り、私は中身をその紙袋から取り出す。

「ふーん、なるほど……今日はこれね」

一号がしきりに頷いている。私が手にしているのは、子供サイズの衣装。たしか、日曜の朝に放送されているアニメのキャラクターが着ているのと同じかな。詳しくは知らないけど、見覚えはあった。サイズは、私にはちょっと大きめか。しかし着られないサイズではない。

「相変わらず良い趣味してるわね、この変態ロリコンが」

侮辱の言葉が男の頬を軽く赤らめる。むろん怒っているのではない。この奴隷一号は興奮し始めている。

「さ、アンタは服を脱いだら正座して待つてな」

私は衣装を手に、風呂場へと向かった。一度シャワーを浴びてからこの衣装に着替えるために。目の前で着替えるところを見せてやっても良いけど、今日は昼間の仕事で汗を掻いたからちゃんとその汗を流したかった。むろんこの男ならそんな汗臭い私で興奮するのだろうか、そんなサービスマまで今日してやることはない。

「はっ、はい、女王たん……」

なんなんだろうね、この「たん」ってのは。それも女王たんって……何故かこの名称が私の奴隷達には受けが良い。あまり気持ちの良い呼ばれ方ではないが、これくらい好きにさせてやるのも客へのサービスかな。

脱衣場から戻ると、一号は言われたとおり全裸のまま正座して待つていた。

「ほら、着てやったわよ。どう？」

私はくるりと、その場で回って見せてやった。ワンピースの裾が、ふわりと浮く。私の生足と、そして何も履いていないお尻が、男の目に飛び込んだらう。そう、私は衣装の下に下着は着ていない。これからどうせ脱ぐのだから、この方が面倒が無くて良い。もちろん、この方がコイツを興奮させるだろうというのものもある。サービスという意味もあるが、相手を興奮させた方がより良い精気を吸えるのでその為ね。

「……なに早速起たせてるのよ。相変わらずみっともないわね」

正座しているからこそよく判る。男は己の肉棒をもう熱り起たせていた。

「起つてるわりに、ちよつと小さいんじゃない？」

私は衣装に入っていた靴を履いたまま、熱り起つた男の棒を踏みつける。

「いぎっしー！」

完全に力を入れて踏んでいるわけではないが、靴を履いたままで、しかも元が小さめとはいえ膨張しているところを踏まれれば、軽く悲鳴を上げたくもなるだろう。

「ふーん……痛いのか？ それとも……気持ちいいの？」

男は何も答えない。ただ赤い顔のまま荒く呼吸をするだけ。それはもう、恍惚の表情と

言って良さそうだ。私はこのまま軽く足を動かす。すると足下の肉が靴越しにでも判るほどビクリと痙攣する。顔はもちろんよりだらしなくなり、口は半開きになっている。それを見て私は口元をつり上げ、足を動かし続けた。

「こんな女の子を買ってホテルに連れ込んで、あげく足で逝かされちゃうんだ。ねえ、情けないと思わないの？」

男は答えない。ただ侮辱の言葉を受け、その言葉に酔いしれるだけ。本人はこれで良いのかもしれないが、質問に答えないその態度は気に入らない。

「答えないよ！」

ぐつと、足に力を入れ踏み込む。その時だった。

「ぐつ！」

男の短いうめき声と共に、白濁した液が男の腹にねっとり飛び散った。

「あはははは、こんなで逝っちゃったの？ いつもながら変態だね、あんたは」

罵倒されながら、男は目に涙を溜めている。むしろ悔しさからではなく……いや、悔しさも多少あるのだろう。むしろそれを感じるからこそその恥辱プレイなのだから。

「ねえ、まだ逝きたい？」

正座した男は、僅かに顔を上げる。恍惚な表情を浮かべるその顔はもちろん、もっと続けて欲しいと懇願こんがんしている。しかし言葉にしなければ意味がない。言葉にしてこそそこに恥辱が生まれ、興奮できるのだから。口元を歪め、私は再度一号に尋ねる。

「どうなの？ これで満足なら止めるわよ？」

男にとっての理想が、今日の前にいる。屈辱的な言葉を投げかける、魅惑的な少女が。そんな少女が自分好みのコスプレまでして自分の肉棒を踏んづたまま尋ねているのだ。答えはもう決まっているも同然。

「……まだ、逝きたいです。女王さんに、何度でも逝かせて欲しいです」

涙目のまま懇願する奴隷。その返答に満足した私は肉棒から足をどけ、次の命令を下す。

「そう……なら、あの鏡に向かって四つんばいになりなさい」

部屋に置かれていた姿見に向かって四つんばいさせ、私は男の後ろに回り靴を脱いだ。

「ほら、存分に感じなさい」

私は足のかかとを、男の尻にグリグリと押しつけた。

「うぐつ」

短い悲鳴は、すぐに荒い息へと変わる。男は正面を見た。そこには、アニメキャラの衣装を着た少女に、尻を踏まれ喘いでいる自分の姿。

「こんなでも興奮できるなんて、やっぱり変態よね」

罵倒される快樂に息が荒くなる男は、じつと鏡越しに私を見つめ、更に息を荒げていく。

「あなたが変態なら、そのまま自分のをしごいてみなさいよ」

私からの素敵なアドバイスに、男はゆっくりと従った。片手で身体を支え、片手で自分の肉棒を掴み、そしてゆっくり前後に動かしている。

「あはは、変態って認めたのね。ねえ、変態なら「僕は変態です」ってちゃんと言ってみてよ」

男は頭を下げしばし黙っていたが、やがて口を開いた。

「僕は……変態……です」

言ったきり、男は尻を踏まれる感触を楽しみながら自慰に没頭した。恥ずかしさから顔を下げたまま、その辱め^{はずかし}に自身を集中させ興奮を得ている。

「よく言えたわね。折角だから、ご褒美を見せてあげる。さ、前を向きな」

男が顔を上げ、再び姿見を見る。そこには、スカートの裾をまくり上げ、股間を露わにしながら男の尻を踏み続けている私の姿が。

「どう？」

返ってくる答えを知らながら、私は尋ねた。

「萌え……女王さん、萌えます。とても可愛い……素敵です」

少ないボキャブラリーなりに、私を褒めちぎる。もうちょっと別の言葉、別の褒めようもあると思うが、まあこの男ならこんなものか。

「当然ね。さあいいわよ、それだけ素敵な私を見ながら、また逝っちゃいなさいよ」

グイッと、足に力を入れる。男はより激しく手を動かしている。ハアハアと荒くなる男の息。そして僅かに、私の息も荒くなってきた。

「本当に無様な格好。これで人間だって言うんだから……アンタなんか豚で充分よね」

手の動きが速くなる。私も足に入れる力を増してあげた。そろそろ、コイツは逝くだろう。

「うっ……」

案の定、短い声と共に白濁液が男の真下へ飛び散り、敷かれたカーペットが汚されていた。

「あらら、本当に逝っちゃったのね。さすがはへ・ン・タ・イ」

男は肉棒から手を放し、両手で床に手を付く。言葉は耳に届いているだろうが、男は荒い息を整えるのに必至で返答が出来ない。

「ばさつとしてないの！」

私は強く尻を横から蹴り、男を仰向けに寝転がせる。

「ほら……いよいよお待ちかねのこれよ」

私は男の顔をまたぎ、先ほどまで鏡越しで凝視させていた私の秘所を眼前に見せつけた。

「舐めなさい」

私の命令に従い、男は私の秘所へ舌を必至になって伸ばす。ピチャピチャと、軽い音が微かに聞こえる。もう何度も舐めさせてきたが、未だにどこかきこちなく、舌の動きがもどかしい。

「……まったく、相変わらず下手くそだね」

こう侮辱されたいが為に技術の向上をさせないでいるのだろうか。ま、本当に不器用なだけというのが真相だろうけど。このままでは時間がいくらあっても快樂にまで到達しそうにないが、私は続けさせた。この後の下準備のためと、奴隷をより興奮させるために。

「あら、もうずいぶんと起たせてるのね。流石変態。二回も逝つといて、さっきまでより大きくなってらんじゃない？」

後ろにのけぞり手で触れてみると、ビクリと軽く跳ねた。二度も逝ったばかりで敏感になっっているのだろう。だが二度も逝ってるからこそ、そう簡単に三度目はないだろう。

私は腰を上げた。一号の舌が名残惜しそうにまだ天に向け伸びていたが、それに構わず私はそのまま後ずさり、しっかりと肉棒を掴みながらその上に腰を持って行く。

「さ、よく見なさい。入れるわよ」

男のそれを自分であてがい、私は一気に腰を落とす。

「んっ！」

「くっ！」

思った通り、流石にここで三度目へと達する事はなかった。以前は入れただけで逝くこともあったくらいだから、ちよつとは持つようになったかな？　しかし男の肉棒はビクビクと私の中で脈打ち、すぐにでもまた出してしまいそうな雰囲気はある。

「ちよつとはもたせてよね……ん、あ、うふっ……んん」

言いながら激しく腰を動かす私。保てとは言ったけど、その事に気を遣うつもりはない。なにせ二度も逝かせて……そこから私は本来の目的である精気を吸い取れなかったのだから、この三度目でたっぷりと貰わないと釣りが合わないし。

「ちよっ……胸ぐらい、揉みなさいよ……ほら！」

なすがまま寝そべっているマグロ。私はマグロの手をとり、自分から胸にあてがった。

言われてやつと、男はぎこちなく手を動かしてきた。そして興奮からか、やつと腰もこちらに合わせ動かすようになった。

「そう、よ。これくらい、言われないでも、ん、しなさい、よ……あっ、ん……」

まったく、立場上コイツは確かに客なんだけど、お客様気分なのかされるがままでいれるのは困るのよね。自ら奴隷一号を名乗ってるんだから、ちよつとはご主人様を気持ちよくしてやろうって気遣いがないのかしら、コイツは。ああ、もしかしたら積極的になる私を楽しんでいるのかな？　だとすれば……店でも常連としてみられているだけはあるって事かな。まったく、生意気ね。

胸のブローチが邪魔なこともあって、衣装越しでは胸は揉みにくそうだ。それでも何もされないよりはマシ。私はとにかく、ここで少しでも「成果」が欲しいと焦った。快楽を与えるだけで、快楽を得られないのはあまりにも理不尽。腰を振り、私は貪欲に快楽を求めた。それがコイツの思う壺だったとしても、もうどうでもいいわ。そんな事にまでいちプライドを張っていられないし、何より、私も気持ちよくなりたかった。

「ほら、もっと……ね、もっと、突き上げなさい、よ……ほら、もう少し、だから……」

このままでは、男の方が早いだろうか？　焦った私は、とつとつ片手で自分の胸を揉み、そして残った手で自分の陰核をまさぐり始めた。

「あ、いい、やっぱり、自分でした方が……いい、ああ、あんたも、もっと、あっ、んん！」

これでは自慰と変わらないのでは？　ふとそんな事も思ったが、快楽を求める私にそんな事はどうでもよくなっていた。

「どう、気持ちいいの？　いって、ごらん、さいよ……」

「はい、きもち、いい、です……女王、たん、女王、たん……きもち、いい、きもち、いいです……」

途切れ途切れに喘ぎながら言葉を絞り出す奴隷。これでこの男にかわいげがあればその声がかんフル剤になることもあるのだろうけど、コイツではそこまで望めないわね。私は男が誰であれどうであれ、ここまで肉棒を熱く起たせているという事実自ら興奮し、乳首と陰核をコリコリといじり続ける。

「女王たん……そろそろ……」

「ダメよ！　ここで逝ったら二度と入れさせてやらないんだから！」

何度逝こうが構わないけど、ようやく私も「頂点」に上り詰めそうなのだから……「こ」でコイツが逝って入れている肉棒が柔らかくなったら、「こ」ちが逝くのをじらされてしまう。この堅さはキープして貰わなくては困る。私は陰核をいじるのを止め、その手で肉棒の根本をぐつと掴んで堪えさせた。

「がんばり、なさいよ……もう少し、もう少し、だから……」

より激しく腰を振る私。掴んでいる肉棒がはち切れそうなほど膨張している。小さな私の手ではぐつと握るのも困難なほどになっているが、コイツの肉棒は元が小さいからまだ私の手でもどうにかなっている。まあ、よく考えれば元が小さいから私がここまで逝くのに苦労させられているとも言えるんだけど。

「もう少し、いいわ、そのまま、ん、あつ、そろそろ、あつ、ああん、はっ、いい、いい、んっ！」

ビクビクと私の身体が小刻みに震える。それと同時に手を放し肉棒を解放してやると、勢いよく私の中へ奴隷の精子と精気が流れ込んでくる。二度目だというのにたいした量だ。膣の奥でその量を感じた時、私はやつと「成果」を得た。

「はあ、はあ……まったく、三度目なのにまだこんなに出るなんて。流石変態ね」

量の多さは私にとつてありがたいことだから、私はコイツが喜ぶよう言葉を選び褒めてやった。むろん一号は嬉しそうに汚らしく笑顔を作っている。

「でもさ……ちよつと下手すぎるのよ」

この言葉も当然侮辱の一種だが、しかしこればかりはこの男も本気でへこんでいる様子。快樂のために発している侮蔑ぶべつの言葉ではなく、私の本音なのだからここでへこんでくれなくて困るのだが。まあ客に対して「下手くそ」などと本気で言うのはどうなのかとも思うが……そもそも私に、そしてコイツにも、「客」という意識はほとんど無い。それぞれがより楽しめるように、もうちよつと改善を試みる必要があるのかも。

「ほら、アンタが汚したんだから、アンタが綺麗にしなさいよ。もちろん自分の舌でね」

私はベッドに腰掛け、股を大きく開いて男に見せる。男は当然また興奮し始めるのだが、私が欲しいのは四発目ではなかった。

「ついでに、私を気持ちよくしてご覧なさい」

そういえば、私はコイツの女王として「育成」をしてこなかったな。奴隷を奴隷らしく調教するのも女王様の務めかな。やはりぎこちない舌使いのコイツを、私は侮蔑の言葉で丁寧に指導してやった。

疲れる。私が奴隷志願の客達を調教まがいにあれこれとテクニクを指導してやって数日が経過した今、私が出した結論がコレ。

そもそも私は「女王たん」等と持ち上げられてはいるが、自ら率先して呼ばせているわけではない。あのロリ好きな上にDMな客達が好きこのんで言っているだけ。そもそも私はDSでは……いや、確かにSだと自覚はしているが、鞭だとか蠟燭ろうそくだとか、その手の道具まで使うのにはやはり抵抗がある。どうすれば男達が興奮するのか、その術はあれこれ心得ているつもりだけど、その術を用いることで私まで心地好くなるわけではない。最終的に糧となる精力をたっぷり搾り取ることは出来ても、ただそれだけ。私が性的に満足するのは難しい。

私だつてもっと気持ちよくなりたい。私は精力を得るために性交を行うが、淫魔とは違う。だから自らの性的興奮を高める術を私は心得ていない。そもそも私達モーター・シヨポーは、性交などせずに脳髓ずすだけ啜すれば良いはずなのだから、性交に関して淫魔のように本能で術を身につけているわけではない。だからこうして悩んでいる訳なんだけど……。

私は街中で腕を組み、街灯にもたれ掛かりながら悩んでいた。よもや幼女にしか見えないう。私が、街中でエロい事を真剣に悩んでいるなどは誰も思わないだろう。ただ若干、目立っていたかもしれない。もしかしたら迷子に見られてかもしれない。だから、ふと私が気付いた時、目の前に一人の男性……少年とも青年とも見える、若い男が私を見つめたままボーっとつたつたつたつたとしても不思議ではない。不思議ではないけれど、やはり多少なりとも私は驚いた。

「……何？」

その動揺が、私に「幼女」の演技をさせる余裕を奪っていた。普段なら「なあに？」くらいかわいげのある言葉を選んだものを。しかしこの男、私のぶっきらぼうな言葉がそもそも聞こえていなかったか……私を更に驚かせる言葉を口にする。

「おっ……お姉ちゃん？」

「は？」

また私は、素で返答してしまった。いや、流石に驚くでしょ。実年齢はともかく、見た目では私の倍は生きているだろう男性から、「姉」などと呼ばれるなんて思いもしなかった。そして男の方も自分が口にした言葉に驚いたようで、すぐさま慌てて私に謝罪してきた。

「ごっつ、ごめんなさい。その、本当に似てたものだからつい……」

混乱しているからとはいえ、少女相手に敬語か。どうもこの男、少々気の弱い性格らしい。

これは……いけるかも。私の中でこの男が御馳走ごちそうに見えてきた。いつものように「狩る」にしても、その後で「客」にするとしても、この男は今まで私が食べてきた男達にはちょっと見られないタイプ。もしかしたら、先ほどまで悩んでいた問題も解決してくれるかもしれないし……私は早速、この男の捕食とくじに取りかかる。

「知り合いに似てたからとか、昔の恋人に似てたから……なんて言い訳で声をかけるナンパテクなら腐るほど使い古された手口だけど……流石に私みたいな女の子に「お姉ちゃん」

なんて声をかける手口は初耳だわ」

「いや、ナンパとかそういうのじゃなくて……ホントごめんなさい」

口調をあえて素のままにしてみたらかかってきた。案の定謝るのに必死で私の口調とかそのあたりに疑問を感じる余裕もないみたい。後から疑問に思っただろうけど……だからこそ、畳み掛けるなら今。

「あなたのお姉ちゃんとかやらがどんな人かは知らないけど……あなたが私に興味があるのは事実なのかな？」

「いや、あの……そういう事じゃなくて……」

慌ててる慌ててる。私は心中でクスクス笑いながら、攻撃の手をゆるめることなく言葉を続ける。

「まあ、どっちでもいいわ。折角いい男に声かけられたんだし、乗ってあげても良いよ？」
「えっ!？」

男が幼女に声をかけ、幼女がそれに応じる。普通ならあり得ないシチュエーションに、更なる混乱が彼の脳内で渦巻いているはずだ。でも流石にこの男も少しづつ冷静になり始めてきたかな。ならそろそろ決めちゃわないと。

「付き合っただけで言ってるの。まさか自分から声をかけといて、こんな可愛い子をほったらかしにする気？」

顔を赤らめ狼狽えている。なかなか可愛いなコイツ……からかいがあるというか、一つ一つの反応が見ていて楽しい……ああ、やっぱり私ってさだね。今更自覚する事じゃないけどさ。

「その、本当にごめんなさい。これから人と待ち合わせがあって、その……」

なるほど、暇を持て余していたわけではないようだ。突然声をかけた非礼だけでなく、私の好意を受け取れない事に対する無礼に、男は戸惑い困り果てている。どうやらこの男、気が弱いだけでなく律儀な性格でもあるようだ。先約との約束と私の誘いとで板挟みに遭いあたふたしているこの姿を見ていれば誰にでも判る。

「ま、それならいいわ……はい、これ」

私はそっと、一枚の名刺を差し出した。

「こっ、これは？」

戸惑いながらも、男は私が小さな手で懸命に上へと突き出しているその名刺を受け取った。

「この近くにあるメイド喫茶よ。「リリム館」って知ってる？ 私そこでウエイトレスしてるから、遊びに来てよ。場所はそこに書いてあるからさ。じゃ、絶対来てよ？」

私は返答を待たずに歩き出した。男の名前も聞かず、名刺も交換せず。もつとも、彼が名刺を持っているような歳なのかどうかは微妙なところだけど……少なくとも、気が弱く律儀そうな彼なら、この「餌」に絶対食らいつくはず。たぶんまだ戸惑っているだろう彼の方を振り返ることなく、私はその場を去った。周囲に満面の笑みを振りまきながら。

昼のこともあって、私は上機嫌だった。それが油断を招いたのか……らしくないミス^ミスを犯してしまった。昼間の彼が夜店に来る可能性は充分にあったから、私はあえてじらすた

めに店に顔を出さず、今日は狩りをしようといつもの裏道で罾を張っていた。その罾に掛かった男達が、問題だった。

「お嬢さん、名前……教えてくれないかな？」

私は今、不本意ながら男達に「職務質問」というものをされている。二人の男達が私に見せた物は「補導員」の証明書。屈み込み、視線を私に合わせ語りかける、優しげに見える男。私はと言うと……怖がる素振りを見せ、黙秘を貫いている。

さてと……どうしたものか。

夜の繁華街。その脇道で一人たたずむ少女がいれば、補導員が声をかけるのは当然だろう。しかもこの通りは、知る人こそ知る通り。男達が「春」を買いに訪れる通りだ。そんな場所に少女が立っていれば、ますます放つては置けない。

「怖がらなくても良いんだよ」

私の頭を撫でようとすると、もう一人の男。私は頭で軽く手を払い、拒絶する。よほど怯えているのだろう……と思わせる為に。

繁華街には、様々な人々が集まる。故に補導員や警官も巡回を頻繁に行う。そんな事、私は百も承知。だからこそ、補導員や警官らしき者が近づいた時はすぐに身を隠す。獲物と補導員くらい、「雰囲気」で区別出来る。少なくとも私には、それを察する「力」がある。私は長い年月「少女」で居続けている、モンゴルの妖怪なのだから。その私が、この男達を補導員と気付かないなんて。何といつつまらないミスを犯したのだろうか。

「違うのかな……」

ぼそりと、頭を撫でようとした男が呟いた。何と比べて違うというのか？ なんかおかしいなこの男達……私は薄々気付き始めた。

私がこの男達を補導員と気付かなかった理由。一つは、獲物と勘違いした為。この道は女を買いに来る獲物が少年少女を保護する補導員か、あるいはただの通行人が通っていく。私はこの二人を見かけた時に、獲物だと思った。さつきも言ったように「雰囲気」が完全に獲物のものだったし、なにより普段このあたりを周回している補導員なら私は顔を覚えている。新人だとしても、二人いれば普通どちらかはベテランだろう。二人とも新人というのは考えづらい。

しかし、彼らは補導員だった。私に見せた証明書が偽物でなければ。

「いや……噂が確かなら……」

しゃがんでいた男が立ち上がり、小声で疑問を持った男に話しかけた。私に聞こえないよう話しているつもりだろうが、彼らにとって残念な事だけど、私の耳はその話し声を聞き取っている。怯えた振りをしながら、冷静に。視線を落とし、私は屈み込んだ。むろん怯える演出なのだが、この間に私は情報を整理し冷静に判断を付けた。

噂か。これで疑問に答えが示された。小学生くらいの少女が、売春行為をしている。おそらくそんな噂が流れていたのだろう。同じ「狩り場」で狩りを続けていたが、噂が立つ事はないと私は甘い考えに捕らわれていた。何故ならば、獲物の全てが罪悪感と屈辱感を抱える為、わざわざそれを人に話す事がないと高をくくっていたから。売春そのものは当然犯罪だが、相手が少女ならその罪はもっと重くなる。加えて、全ての獲物は「事」が終わった後に全財産からホテル代を除いて全て私に奪われている。これは獲物当人にしてみれば屈辱になるはずだ。

そんな醜態を、人に晒すものか？ 確かに、「普通の」獲物……当人はそうかも知れない。だが同じ場所で客を狩り、ホテルに向かう事を繰り返せば、第三者……他の目撃者が「噂」をし始めてもおかしくない。ついでに言えば、己の醜態を晒してでも、私との情事を「ロリコン仲間」に自慢する輩がいなくても限らない。

長く居続けすぎた。それが私のミスだ。今更冷静に全てを把握したとしても、もう遅いんだけどね。

「大丈夫だよ。お兄さん達は怖い人じゃないから」

怖いかどうかは問題ではない。捕まる事自体が問題なのだ。さて……逃げるか？ いや、それは難しい。残念ながら、私は少女……人間の少女と同じ背格好。逃げ出したところで、大人の男二人を振り切る事は出来そうにない。今立っている通り自体が細道である事もあり、他に逃げ込めそうな道はない。左右を挟まれている以上、逃げるといふ選択肢は排除すべきだ。

では……ここは「とりあえず」大人しく補導されておこうか。事情聴取が始まったところで、「保護者」を呼び出せば……その保護者がどうにかするだろう。貸しを作るのは面白くないが、事を荒立てるのは望まない。それにこれも、あの学者先生の仕事だろ。取引を交わした以上たまには働いて貰わないとね。さてと……そうと決まれば、それまでは大人しく「怯える少女」を演じておくとするか。

「なあ……」

立ったままでいる男が、しゃがんでいる男に声をかけ立たせた……ん？ なにやら、様子がおかしいが？

「いいんじゃないかねえか？ 噂通りだとしてもそうじゃねえとしても……こんな所にいるんだ。無理に連れていっても」

筋が通っていそうで、補導員としては少々荒っぽい内容。

「そうだな……まあ嫌がるのを無理矢理……つてのも悪くないな」

下卑た笑い声が漏れ聞こえる。もしかしたら、聞こえるように笑っているのか？ この展開は……そういう事なのか？

「ねえお嬢ちゃん」

うずくまる私に、再びしゃがみ込み男が声をかける。私は様子を見る為に、顔を上げずただ黙り続けた。根気強い補導員なら、優しい言葉で何度も呼びかけるだろう。

「ちっ、めんどくせえ。ほら、顔を上げろよ！」

ぐつと私の髪を掴み、強引に顔を上げさせた。驚く私に、男は白い布を口と鼻に押し当てた。この臭いは……クロロホルム。何とも古い手を使う。これで確信出来た。私に見せた補導員の証明書が本物かどうかは判らないが、少なくとも、こいつらは真っ当ではない。私はクロロホルムを嗅がされた事で、深い眠りにつく……ふりをした。

カチャカチャと、私の手首に手枷をはめている男達。寝たふりをしている私は自分の状況を目視出来ないが、音と感触でおおよその状況は解る。

私は今、どこかの一室に連れ込まれ、手枷足枷、ご丁寧に首輪まで付けられ、鎖でどこかに繋がられた様子。

予想通り、この手の「趣向」の持ち主らしい。それも、本格的。手枷はガツチリとハンドリストのようにはめるタイプで、手錠とは異なる。首輪も感触から、ペットシヨップで売られているような物ではなく、ラバー制の人間用。何より、手つきが慣れている。

私は自分の「ミス」そのものに多少誤りがある事も確信した。同じ狩り場で続けすぎたミスは変わらないが、補導員を獲物と勘違いした、というミスでは無かったようだ。こいつらはやはり獲物だ。それもかなり質の悪い。獲物が皆少女を買うような連中だけに「正常」というのは望めないが、少なくともここまで「異常」では無かった。その差を察することが出来なかったのは、やはりちよつと昼間のことで浮かれすぎていたせいかな。

しかしこれはこれで、面白い展開になってきたんじゃない？ 私はほくそ笑んだ。むろん顔に出さず心中で。

「そろそろ起きるんじゃないか？」

男の声で、私はそろそろ起きる時間なのかと知らされた。臭いこそ知ってはいたが、クロホルムの性質を熟知しているわけではない。いつまで寝たふりを続けるべきか悩んでいたが、今が良い頃合いのようだ。私は少しだけ問を開け、ゆつくりと目を開けた。

「……なに、ここ……えっ、なに？ おじさん達……え、ここどこ？ なんなの？」

誘惑する演技には自信があるが、こうして混乱するふりをしたのは初めて。ちよつとこの演技に自信が無かったのだが、ニヤニヤする裸の男達の反応を見る限り、問題はなかったようだ。

判つてはいるが、一応目視で自分が置かれた状況の再確認をする。私は裸で、手と足、そして首を枷で封じられている。足の開閉は出来るが、手は拳二つ分程度の余裕だけで繋がっている。後ろ手にされていないので姿勢としてはそんなに苦しくはない。男達も私同様既に裸になっており、一人の男の手には私に繋がっている鎖が握られていた。

「おはよう、お嬢さん」

鎖を持った男が、わざとらしい挨拶をしてきた。ああ、今まで会ったどの獲物よりも下卑た顔をするな。私は顔で怯え心で見下した。少女との性交という快樂以上に、背徳行為に酔いしれるタイプの獲物はこのようなくどく下卑た顔を作っていたが……私がこれまで見てきた中で、目の前の男二人が最も酷い。それほど、今このシチュエーションが気に入りになのだろう。

「なにこれ！ いや、外して！ なんなの！ おじさん達……」

私が身をよじり出来もしない手枷外しに懸命な姿をさらす事で、男達はますます顔を歪ませている。

「それは出来ないねえ、お嬢ちゃん」

ゆつくりと近づく男達。私は顔を引きつらせ、身を縮こめてみせた。

「キミはね、これから俺達の「奴隷」になるのさ」

ああ、やはり。奴隷という言葉に酔っている男達とは正反対に、私は呆れていた。昨日までは私が男達を奴隷として扱っていたが、アレは彼らが望んでいたこと。今私は奴隷になることなんて望んでいない。むろんこの屑野郎どもが私の事情を知るはずもないが、彼らにとつて私がどう思うかなどかまいはしないはずだ。

どうしようもない連中……呆れきり醒めている私は、男が続ける言葉を予測した。この男はこう言うだろう。「俺達の事は」「主人様」と呼ぶんだ、とね。

「俺達の事は「ご主人様」と呼ぶんだ」

ほらね。この手の男達が何を考えているかなど、容易い。まったく、何がご主人様だ。主従関係というものは、信頼という絆で結ばれるもの。ご主人様など強制して呼ばせるものではない。私に「従属心」など無いから感情で理解は出来ないが、強引に従わせては真の主従関係は築けない事くらいは理解できる。まあ、むろん「女王たん」である私は自分のことを棚上げしてるけどそんな小さな事は気にしない。

あれだな……たぶんこいつら、強引にでもご主人様と呼ばせ私を四六時中犯し続けていれば従順な奴隷になるとも思っているのだろう。バカバカしい。どこのエロ小説だよ。そんなこと現実でも出来ると思ってるのか？

「ど……どれい？ ご主人様って、そんな……」

ま、そんな私の感情はさておいて……とりあえず、「突然の事に理解出来ず怯える少女」の演技はこんなところで良いのかな？ クックと笑う馬鹿どもの反応を見る限り、これで正解だったみたい。

「毎日毎日、俺達と犯りまくるのさ。股が乾く事もないくらいになあ！」

「うわー、ひねりも品も無い台詞なこと。」

「そんな……いや、放して！」

ここで私は、暴れてみた。この手の連中は大人しくされるより暴れられた方が「やり甲斐」を感じそうなので。

「ジタバタするな！」

私の首に繋がっている鎖を持ち上げ、男がすごんだ。息苦しさに、私は動きを止めた。

「いや……いやあ……帰して、お家に帰して……」

涙を流しながら懇願こんがんしてみせる。帰る家なんて私にはないけど。

「そうだな……大人しく言う事を聞いていれば、そのうち帰してやるよ」

嘘つき。そんな気などさらさら無いくせによくもまあ。

「ほつ、本当に？」

すぐる思いで、尋ね返す。男達が求めている反応はこんな所だろう。

「ああ、約束する。だから言う事を聞け」

ふむ……ちよつと安直過ぎる気もする。こんな事で、本当に人間のごく普通の少女は言う事を聞くのだろうか？ 弱者ではない私は弱者の心理を理解出来ないが、人間の少女を理解するよりも、この男達を満足させる事を意識した方が良いのだろう。だとしたら、彼らの望む「スムーズな展開」に乗るとしようか。私は黙って、何度も何度も頷く事で、彼らの「シナリオ」を進める事にした。

「よし、良い子だ。じゃあまずは……コイツをしゃぶれ」

男達は自分達の股間を私の顔に近づけ、肉棒を見せつけた。これまでのやりとりで興奮していたのだろう。完全ではないが既に肉棒は反り返っている。ここで「しゃぶる」の意味を理解出来ない、ウブな少女を演じようかとも思ったが、こいつらは、私が「噂の少女」だと承知で誘拐している。ならばあまり回りくどい事はせず、楽しんだ方が良いかもしれない。私は恐る恐る唇を肉棒へ寄せながら、さてどう攻めてやるうかと考えあぐねた。ここ最近、獲物相手には「少女」を演じ続けたし、客相手には「女王たん」を演じ続けているし……久しく全力で楽しんでないなあ。なら、ここは一つ……。

「なっ、なんだコイツ……」

舌先を尿道入り口に突き刺すよう押し当てながら、ゆっくりと口内へと肉棒を誘い込む。充分に誘い込んだところで、私は唇を閉じる。口内では舌先で肉棒の中をほじろつかという勢いで、グリグリと押し込む。しばし後に、私は舌を肉棒の舌に潜り込ませ、口内で回すように舐め回した。

「うっ、ちよっ、ちよっと待て……」

待つつもりなど無い。私は相手の反応を楽しみながら、今度は顔ごと口を動かし肉棒を唇でしごく。その間も、舌は絡みつくように肉棒から離さない。

「やべ、もう……うっ！」

急に、鈴口から勢いよく飛び出す液。私は肉棒からすぐに口を離し、白く粘った液体を咳き込みながら吐き出した。

早すぎる……またか。私は自由の身ならガツクリと肩を落としたところだ。誘拐までするような男だから、もう少し楽しませてくれると期待していたんだけど……所詮ターゲットがか弱い少女という根性無し。この程度か。

「お前、早すぎるだろ」

「っさいなあ。ならお前やられてみる」

間抜けなやりとりだなと思いつつ、咳き込み続け気付かないふりをしていた私。そんな私に突きつけられる肉棒。顔を上げると、手で肉棒を押さえている男が私の頬に肉棒をぴちぴちと押し当て急かした。この男も同じようなものだろうな。諦めた私は、ならば色々「数」を楽しむ事にしよう、先ほどの男とは趣向を変えてみる事にする。肉棒の先からではなく、まずはその付け根、そこにぶら下がる陰囊ふくりから。

「おお！」

驚く男を尻目に、私は小さな口で袋の片側、玉を一つだけ口に含み、舌でなめ回す。そして自由のきかない手で肉棒を掴み、強く早くしごく。手は中指だけ折り曲げて握っている。こつする事で、普通に握るよりも強い刺激が部分的に与えられる。下手をすると、このやり方は痛いだけになる。だが少女の私にそんな強い握力はないし、加減かへんくらいは心得ている。

案の定、この男も早々に果てた。

「はあはあ……そんな……」

快楽には満足したが、短すぎる快楽に不満と情けなさが入り交じっているのだろう。

「あつ、あの……これで許して貰えるんですか？」

私は「弱い立場」のまま、男達を挑発した。

「そつ、そんなわけないだろ！」

怒れる男はまた鎖を持ち上げ私を苦しめる。こつしないと、自分の立場を保てないのだ。少女相手になんと無様か。

「これからだよ、お楽しみはな！」

そうあって欲しいものだ。私は怯えた目を向けながら期待に瞳を輝かせた。男は私を押し倒し、強引に足をぐいつと広げる。

「ん？ なんだコイツ……」

露わになる私の「股」は、既にたっぷりと濡れていた。今までにないシチュエーション

に興奮していたのは、なにも男達だけではなかったということ。淫靡じゃなくてもこれくらいの準備は私にだって出来る。

「へへっ、コイツ、俺達のを舐めながら期待していやがったな。もうこんなになつてるじやねえか」

ぐちぐちになった私の股間に手を伸ばし、秘部を指でなぞる男。触れられた事で、私はピクリと身体を反応させる。

「いやあ……」

こんなにしてまで恥ずかしがるのもおかしい話だが、その方が男を「燃えさせる」だろう。ん？「萌えさせる」と言うべきか？まあどちらでも良い。私を満足させてくれるのなら。

「何を今更嫌がつてんだ。この淫乱奴隷が」

私は不自由な手で顔を隠し、言葉攻めを受け入れる。

「こいつ、もう調教受けてたんじゃねえか？ さっきのアレだつて上手すぎるだろ」

ああ、そう思われるか。それは……まあそつか。さてどうしようかな……この男達が「初物」にこだわるタイプかどうかで、この後私がする対応が変わるんだけど。

「そつ、そんな事はない……です」

男の言葉が言葉攻めのつもりだったのか確認するつもりだったのか……どちらにせよ、否定した方が無難だろう。

「へっ、あれだけの事をして、今更カマトトぶつてんじゃねえよ」

どうやら、言葉攻めを楽しんでいるだけのようだ。そもそも、私がああ「狩り場」に立っていた事で、彼らは私を初めから「淫乱少女」と決めつけていただろう。だとすれば、調教済みかどうかはあまり関係がないのかもしれない。

「おい、今まで何人の男と寝たんだけ？」

さて、どう答えよう？ まあ言葉攻めのつもりならば……

「さつ……三人……です」

かなり少なく見積もった。

「嘘付け！ 三十人の間違いだろ！」

また鎖で私の首をぐつと持ち上げ、男が怒鳴る。

「はっ、はい……ごめんなさい、三十人で……す」

本当のところ、三十でも足りないと思うが……流石にそこを馬鹿正直に答える必要はないし、何よりいちいち数えてないし。とりあえず三十人よりは多いはずだけどね。

「はっ、さすが売女ばいどだな。こんな歳で随分とやりまくってるじゃねえか」

調子が出てきたのか、男達は自分達の優位を見せつける事で満足と興奮を得始めているようだ。

「おい売女。そろそろ欲しいんじゃねえか？」

今度は指を二本、男は秘所の入り口をまさぐるように突き入れる。

「あつ……そ、そんな事……」

「こんなに濡らして、説得力がねえだろ？」

ぐつと、指に力を入れる。私はそれに大げさな程反応して見せた。

「ほっ、欲しい……です」

実際、私はいい加減このくだらない言葉遊びに飽きてきた。そろそろ次を楽しみたい。

「なら、ちゃんとおねだりして見せる」
卑猥な懇願を期待する男達。私は飽きてはいたが、男達をより興奮させる為に、彼らの望む的からは少しはずした懇願を試みせる。

「私の……ここ……入れて、くだ……さい」
「そうじゃねえだろ！」

興奮した男は、もう力の加減が効かないらしい。力一杯、私の首を鎖でぐつと持ち上げた。

「お前は俺達の奴隷で、俺達はお前様だ。なら、言い方ってもんがあるだろ？」

その答えを、年端もいかぬ少女に想像させ答えると？ 普通なら無理な話だが、そこまでリアリティーにこだわる事もないか。彼らにしてみれば、そうだな……アダルトゲームでもしている気分なのだろう。あの、理不尽で強引な、そして都合主義の展開を望みなら、リアリティーよりもテンポの良さと「萌え」要素が重要か。

「わっ、私は、どうしようもなく淫乱な奴隷……です。どうか、お前様……その、固く……て、大きい、その、たくましいおチンチンで、淫乱な奴隷の、お、おまんこ……を、お楽しみ、くだ……さい」

我ながら、なんて台詞だろう。普通の少女なら羞恥心で恥ずかしいのだろうが、私は別の意味で恥ずかしい。よくもこんな台詞を言えたものだ。しかし効果はあったようで、男達の「たくましいおチンチン」は限界にまで反り返り、息もかなり荒い。何かお主人様らしい事を言うのかと思っていたが、我慢出来なかったようだ。リーダー格の鎖を持った男が、飛びつくように私の淫唇に腰を押し当て、それなりに固いが貧弱な肉棒を突き入れた。

「あはあ！」

私は声を上げ、それを迎え入れる。

「あ、ん、そん、な……は、激し、く……あん、はあ！」

狂ったように動かされる、自称お主人様の腰。まるで軽いダッチワイフを弄ぶように、小さな私の身体を簡単に持ち上げ荒々しく扱ってくる。その扱いはぞんざいだ、これくらい荒々しい方が私も嬉しいのだから問題なし。というよりは、テクニクを求められないならこれくらい荒々しくないと私が楽しめない。

「おっ、おい。俺にも楽しませるよ」

出遅れたもう一人の男が、抗議の声を上げた。

「うるせえ、黙ってる！」

気の利いた言葉も出せない程、男は私に夢中だ。だけど心配はいらない。そう待つ事もないだろうから。

「くっ、もう……うっ！」

腰の動きが止まり、強く私に押しつけている。ドクドクと熱い私の糧が流し込まれていく。本当に早いなあ……予想通りだけどガツカリね。

「どけっ！ 次は俺だ！」

まるで奪われたお気に入りのお人形を取り返すように、待っていた男は私を強引にはぎ取り、自分の前に連れ出した。

「お主人様、今度はこちらの……ああ！」

どうせなら次は別の穴をと思い、私は演技もせずに自ら尻を男に向けた。興奮しきっている男は積極的になった私に何の疑問も感じることなく、そして口上を最後まで聞かずに、もう一方の穴……アナルへと肉棒を突き入れる。

「いい、いい！ お尻、おしりいい！」

この男達、一回一回が短い。そこで私は、声を出す事で自らを興奮させ出来る限り一回一回から快楽を得ようと懸命になった。もう、この男達はやる事しか頭にない。演技をする必要もないだろう。

「奥まで届いてる、届いてる！ 良いよ、すご……ふっっ！」

不意に、私の口に何かが押し込まれた。先ほど果てたばかりの男だ。途切れる事を嫌うかのように、この男も快楽を求め続けている。

「クチュ、チュ……は、あはあ！ 美味しいよあ……んっ、んチュ……いい、気持ちいい、あん、チュツ、クチュツ……」

完全に私の色香にやられた男達。果てては突き入れ、動かしては出す。それを幾度も幾度も繰り返す。

「くそ、なんだこいつ……尻が吸い付いてきやがる」

「口も……くっ、舌も、こいつなんなんだ……」

色々疑問を感じて当然だ。怪しんで当然だ。心のどこかで、不安すら感じているはずだ。けれど、離れようとはしない。むしろ離すまいと、必死に腰を振り、幼女という熟女にむしゃぶりつく。そしてまた大量に放たれる白濁液。私はそれを喉と腸で飲み尽くす。

「ご主人様あ……今度はこつちとこつちでお願いしますっ」

お尻を突き上げ、手で淫唇を広げ、二本の肉棒をそれぞれにねだる。無言のまま男達は一気に突き入れてきた。

「んっ！ いい、中でコリコリ、ゴリゴリ、擦れてるのが判るの……ん、いい、気持ちいいですご主人様あ」

前後を乱暴にかき回されながら、私はこの激しさを楽しんだ。男達とはいえば完全に我を忘れ、小さな私を奪い合うようにがっちり掴み、ただただ腰を激しく振るばかり。そこに愛情なんかまるでなく、テクニクも当然、理性だつて一欠片ひとかけらさえない。ただ本能に突き動かされ、快楽だけを求める野獣がいるだけ。

私は淫魔とは違う。だけれども、淫魔と同じように男達を夢中にさせることくらいは出来る。これがその成果つてとこね。

「あっ、出た、出てる……ビクビクしてるっ……ん、あん！ また、い、もつと、ねえ、激しくっ」

無言のまま放ち、そしてまた腰を動かす。男達に出来ることは、もうそれだけだった。

「もつと、もつとあ！ ちょうだい、もつとちょうだい！」

私は久しぶりに全力で、「狩り」を楽しんでいる。

「つたく、この役立たずども！」

結局、完全に私を満足させるに至らなかった男達。二人がかりでこの程度か。まさに精も根もを使い切り、気絶するまで腰を動かした二人の男。そんな性格的にも体力的に

も技術的にもどうしようもないゲスな男達を目の前に、私はこの行き場のない怒りと達しきれなかった興奮を持って余っていた。

「勢いだけじゃダメかあ……」

激しければどうにかなると思っていたんだけど……それだけだとダメね。なんというか、何事もかんきゆう緩急かんきゆうって大事なんだなあということを学びましたよ今日は。こいつらの事とか、こいつらを呼び寄せてしまったミスとか、色々。

「……さて、どうしようかしら」

高まる感情をなんとか押しとどめ、私はこいつらの「処理」と今後をどうすべきか悩んでいた。

「もう、あの狩り場は使えないし……」

こんな男達にまで広まった噂。もう、あの狩り場で狩りは続けられない。そう考えると、ここで「騒ぎ」が起きてても問題ないだろう。しかもここはいつものラブホテルではない。厳密にここがどこかは判らないが、この男達が「犯罪」に幾度も使用していた場所だろう。ならば、ここで「変死体」が発見されても、世間を大きく騒がせても同情される事はないし、むしろ社会貢献になる。

ならば久しぶりに、「メインディッシュ」を頂くのも悪くはない。

メインディッシュ、それはもちろん、この男達の脳髓。

私は元来、誘惑して近寄ってきた男達の脳髓を喰らう妖怪。だが私は……ちよつとした気まぐれで、それを控えていた。あの学者先生との約束だとか、正直守る必要なんて本当はないはず。そう、単なる気まぐれ。ここでこいつらの脳髓を喰らう事に、後ろめたさなど感じる必要はないのだ。

「そうね……久しぶりに、いただきますか」

私は鳥の姿へ身を変え、クチバシで頭蓋骨をたたき割ろう……としたその時、音が鳴った。私の携帯の呼び出し音。

こんな時に誰だ？ 私はタイミングを外された不機嫌さを隠すことなく、電話に出た。相手は……これもまた図つたように、先ほどからチラチラと脳裏に出てきた自称保護者その人だった。

「もしもし！ えっ！ うん……え？ うん……ああ、なら手遅れね」

電話の内容は、「ここ最近私の狩り場付近で悪質な事件が多発しているという警告だった。補導員を装った男が、家出少女などに接近し、「いたずら」をするらしい。未遂も多いが、実際に被害報告も出始めたらしく、この保護者は心配になって電話をかけたらしい。

もちろん、心配しているのは「加害者」の方。私に加害者が近づいたら、無事ではいるはずがない。それを保護者はよく判っていた。この学者先生は人間と私達人外の者達とのトラブルを解消する仕事をしている。その為、必要以上に騒ぎを起こして欲しくないのだ。

「大丈夫よ。まだ生きてるわ……えっ？ うーん、どうしようかなあ……」

迷っている振りはしているが、流石にもう脳髓を喰らう気はそがれた。この男達の処分を保護者に任せる事で、私は今後の面倒な事柄を回避する方が得策だと考え始めていた。

しかしだからといって、すんなり引き渡したら面白くない。

「なら、交換条件で……んん、大したことじゃないわ。ちよつと調べて欲しいことがあるのよ」

ちようどいい。私は気になることを一つ……一人、調べて貰うことを条件とした。その人とはもちろん、昼間の男。この誘拐レイプ犯達で満足できなかったから尚更、私の興味は昼間の彼へと完全に向けられていた。顔写真や名前などはいずれ店に来るだろうからその時にどうにかするとして、とりあえずここで約束を取り付けておいた。

さて、次はこのバカタレ達の処分だ。

私は大ざっぱな指示を電話で受け、そして通話を切る。そして携帯を手にしたまま、私は無様に転がっている男達にその携帯のカメラを向け、何枚もの「羞恥写真」を撮りまくった。

妖精学者という立場としては、男達の命に問題が無ければそれだOK、というスタンスらしい。むしろ犯罪者には法で裁けない徹底した「罰」を与えるべきだろうとすら考えている。そこで彼は、私に証拠写真と、ついでに恥ずかしい写真も押さえておいてくれとだけ指示を出していた。私は言われたとおりメモリいっぱい写真撮る。これをどうするかは……しらない。判るのは、もう私に面倒が及ぶことはなくなるだろうと言うこと、この男達が警察に突き出されること、そして法で裁かれる以上の罰が下されるだろうということ。たぶんこの写真をネットにばらまいたりするだけには止まらない、色んな事をするんだらうなあ……詳しくは知らないけど、あの学者先生を敵に回すのは相当に勇気がいることらしい……別に私は怖がってないけどさ。

とりあえず写真を撮り終え、私はこいつらがプレイで使いそびれた荒縄で縛り上げ、この場を後にした。まもなく、うちの保護者に指示を受けた誰かが「処分」しにくるはずだ。

人間社会にも裏表があるけど、もっと深い裏がこの世には存在する。私のような妖怪の存在もそうだし、それをサポートする人の存在とか。安易に自分達の快樂だけの為に犯罪に走り、あげくこのざまか。運が悪いつて事じゃないね、こいつらは「裏」つてものを知らなすぎたのよ。

むしろ運が良いわ……脳髓吸われなくてすんだんだからね。

まずそんな脳髓に未練はないわ。もう私の思考は、あの虐めがいのある可愛らしい彼へと移っていた。

「焦らすなら二回。それだけ焦らしてから三回目に会うのが効果的なよ。昔、大陸の凄
い人がそんな方法で、なんか偉い人のハートをゲットしたって話らしいよ？」

「えーっと……「三顧の礼」の事だとしたら、ちよっと話が違うと思うな……」

そうなの？ 私はこれを「孔明の罠」という恋愛テクニクだと聞いたけど……違うの
ね……まあいいわ。私はホール長に「私を訪ねに来た初顔の客」がいることを告げられて
いたが、初日は店にも顔を出さず、二日目は見つからないよう隠れてやり過ごしたんだけ
ど……三日目の今日、そこまで拒む理由を尋ねられたので答えたのが今の。私が誤って覚
えていたかどうかはさておいて、実際に焦らしのテクニクとしてはこれくらいがちょ
ど良いし、これ以上はむしろ逆効果になる。私は初めから今日ちゃんと会ってあげるつも
りでいた。

「随分可愛らしい子ね」

落ち着かない様子で席に座っている一人の男性……今日も私服なのでイマイチ学生なの
か社会人なのか判断できないけど……先日の彼が、姉にソックリだという私を訪ねに来て
いた。それを今、私はホール長と一緒に彼からは見えづらい厨房の隅から眺めている。よ
しよし、あの緊張っぷりからこっちのペースに話を持って行くのは容易そうね。

「克蘭ちゃんも、ああいう子を食べちゃうんだあ……」

言い方がえげつないわよ、ホール長。まあ、この店は裏でそういうこともやっている店
だからね。

「じゃ、ホール長。写真お願いね」

「ええ。彼の顔写真を取って、天道寺さんの所に送ればいいのね？」

天道寺とは、私の「自称」保護者であるフェアリドクタイ妖精学者のこと。名前だけは古風な奴だ。そ
の天道寺とは先日、彼の身辺調査をしてくれるよう約束させたんだけど……なにより調査
の元となる情報が無いことには始まらない。そこで私は彼の顔写真を店内の防犯カメラで
撮影してくれるようホール長に頼んでいたわけ。名前とか、そーいうパーソナルデータは
これから私が聞き出すところ。

それにしても……なんでこんなに気になるんだろう、あの子のこと。自分でもちよつと
疑問なんだけど……やつぱり久しぶりに「いい男」だからかな？ それしか理由が思いつ
かないのよね。ま、いつもいつもロリコンの変態ばかり相手にしてきたから、ようやく食
らいついた良質な獲物によだれ涎が止まらないってだけなのかもね。

「何度も来てくれたんだって？ 律儀ね。可愛いところあるじゃない」

長身のお姉さんキャラなら決まる台詞なのにねと、見た目少女の私が自分で口にしとい
て笑ってしまう。その笑みが彼には自分への微笑みに見えたかな、それともさっきの台詞
の効果か、頬を赤らめてるわ。ホント、可愛らしいわ。私はそんな彼の様子を見てまた笑
みを浮かべつつ、同じテーブルの対面席に腰掛ける。どうでもいいけど、この店の椅子は
私には高すぎるのよね。テーブルに手をかけてよじ登らないと座れないんだもの。

「うん……遊びに来てって言われたし……」

言われても、興味なければ来ないわよね。それもこんな店……メイド喫茶なんか。こ
の子はたぶん、この手の店は初めてなんだろうな。来店したときから恥ずかしそうにして
たし。それでも来てくれたなんてねえ……んー、ますます可愛げあるじゃない。周囲でな

んかじつとこつちを睨んでる下僕どもとは大違い。

「そう。つまり、ナンパの続きってことね？」

「いや、そうじゃないんだ。ホント、それは勘違いで……その……」

なによ、人が折角ここまでお膳立てしてあげたのに、そこまで全力で否定しなくてもさ。ま、気持ちはわかるけどね。

「お姉ちゃんに似てるって話だっけ？」

「はい……本当に、突然変なこと言い出してすみませんでした」

彼にとっては、この謝罪が一番の目的なんだろうな。テーブルに両手を突き、深々と頭を下げている。彼にとってはこれで良いんだろうけど……小さな女の子に対してここのまで頭を下げる光景って、端から見ている分にはかなり凄いいことになってると思うよ？

「いいわよそんなこと。それより、本当に似てるの？」

「はい。本当にソックリで……姉が生き返ったのかと思ったほどでした？」

「生き返った？」

思わずオウム返しに聞き返してしまった。

「あ……はい。姉はボクが小さい頃に亡くなってしまっ……」

なるほどね。いや、薄々そういうことかなあとはい思ってたけど。だってさ、普通姉のイメージといえば「年上」なはずで、本当にソックリでも幼少の頃の姿がすぐに現実の映像と被ることはなく……つまり、彼の中で姉のイメージが幼少の姿で止まっているから、私を姉に似ていると思っただんたろうなあ。

「そう。悪いこと聞いちゃったわね」

「いえそんなこと……ないです」

まあ定番の台詞だけど礼儀としてね。実際予想通りだったとしてもあまり気持ちの良い質問ではなかったし。

「それで……姉にそっくりな私を見つけて、思わずナンパしちゃったって事？」

「いやそういうわけではなくて……」

場の空気を入れ換えるために、私はすぐさま彼をからかった。恥ずかしそうにしてる姿をみて、思わずにやけてしまう。

「なーにい？ もしかして、シスコンでロリコン？」

「これももちろん冗談の延長……のつもりだったんだけど……」。

「なによ、凶星？」

茹で上がるかと思うほどに顔を真っ赤にし、俯く彼。本気でそうなの？

「両親が言うには、生まれたときからずっとお姉ちゃんっ子だったらいいです」

俯いたまま、それでもけなげに答える彼。なんか聞いた私が悪者みたいね……これじゃ。参ったわね……流石にこれではこれ以上からかえないわ。というか、これからこの子をどうやってホテルに連れ込もうかってところなのに。

「あの……クラン、さん、で、よろしいんですよね？」

私の胸元に付いているネームプレートを見ながら私に問いかけてきた。

「ええ……出来ればあなたの名前も聞かせてくれる？」

「鳥羽、鳥羽誠です。あの、クランさんってこの店で働いているって事は……その……」

「見た目より年上かって事？ ええ、その通りよ。残念だった？」

ロリコンにも、容姿がロリならOKって奴とか実年齢も伴わないとダメだって言い張る奴とか、色々いるからね。まあ、後半のはちょっと問題あるけど……とりあえず、顔を激しく横に振りながら、誠くんは否定してみせた。

「むしろホツとしています。小さな女の子からナンパだとか付き合っって良いとか、ボクが言わせてるのかなと思ったら……」

「それはつまり、実年齢がOKならデートに誘っってくれるって解釈で良いわけね？」

慌ててる慌ててる。いやいやいやと言葉で言い手を激しく振りながら否定はしているけど、顔がちよつと嬉しそうな、隠し切れてないぞ。ホントにもー、可愛すぎるわこの子。

「なら決まりね。着替えてくるから、ちよつと待ってて」

「え？ いや、だからそういう事ではなくて……」

否定なんて聞き入れないわよ。ここで一気に畳み掛ける！

私はさっさと椅子から降り、スタッフルームへと急いだ。流石に追いかけてまで私を止めようとはしない彼は、黙って席に座ったまま。私からは見えないけど、たぶん真つ赤な顔をして俯き固まってるんだろな。ふふ、さーて……どうやって食べちゃおうかなあ。

私は思わず垂れてきた涎を拭きながら、スキップでもしそうな勢いでスタッフルームに入る。

まずは二人つきりで静かに話せる場所へ。そう言っって私は、彼を最初のデートスポットに誘った。

「もしかしてラブホは初めて？」

私は手慣れた感じで、人目の付きにくいルートを選びながらラブホテルへと直行したんだけど……その間も彼は緊張してたみたいで、目の前にラブホテルが見えたときの反応と……ふふ、思い出すだけで笑いがこみ上げてきそうだわ。

「なんか誠くんって見た目童貞っぽいけど、どうやらその通りみたいね」

シスコンで、その対象の姉が少女のまま止まっってしまったが故にロリコン。それでは確かに、なかなか異性と関係を持ちづらいかもね。たぶんこの子の顔立ちからして、モテてはいると思うんだけどね……もったいない話だけど、私にはラッキーかな。

私は今ラブホテルの一室でベッドに腰掛けている。彼は立ったまま硬直してる。さすがにこの展開に思考が追いつかないかな。その固まった思考に、色々とすり込んでしまいたいよ。私は新鮮な獲物をじっくりとたっぷりと味わうために、彼の性癖に付け入ろうと策を練る。

「シスコンでロリコンか……言い換えれば変態よね」

ピクリと、私の言葉に反応する彼。当然だけど自覚はあるわけね、色々。

「童貞で変態な誠くんは、お姉ちゃんにこんな所へ連れ込まれて興奮してる？」

ギョツと握った手が震えてる。むろん顔も赤い。でも、否定の言葉はない。その代わりに、彼の股間が見て判るくらいに膨らみ、私に返答している。彼にとってまさに理想通りの少女が、目の前にいる。そしてその少女が、姉が、自分を誘っているのだ。理想が現実となり、興奮を禁じ得ないのは当たり前か。

まだ会っって間もない少女に翻弄ほんそうされ、でも理想通りの展開へ持ち込まれる。彼の固まっ

たままの思考では、理性が崩れるのを押さえることは出来ないはず。

もう彼は、私のもの。

「ねえ、ど変態の誠くん。君は「こんな物」に興味はある？」

ベッドの上に立ち、私は彼の目の前で自らスカートを持ち上げる。彼の目は、スカートの中に隠れていた私の下半身に釘付けとなった。それはそうでしょうね。私、下着を履いていないから。露出した、まだ毛も生えぬ恥丘が露わになっている状態。それを彼は息を荒げ始めながら凝視している。

「大ありって所ね。いいわよ、触るなり舐めるなり、好きなようにして」

まるで催眠術にでも掛かったかのように、彼はふらふらと私の方へと近づき、四つんばいになる。そしてじつと私の恥丘を観察した後、ぺろりと舌を伸ばした。

「んっ、いきなり舐める方を選ぶなんて……やっぱり変態ね」

私の言葉に頬を赤らめながら、しかし初めて味わう女性の味に、彼は夢中になっている。テクニクとか、そんな物は童貞の彼が持ち合わせているはずもなく、ただ夢中になって舌をピチャピチャと音を立て舐め回すだけ。

「まるで犬みたいね」

いつの間にか、彼は更に顔を押し当て、私の腰に手を回しより密着させていた。息をすする事すら忘れる程、彼は舌を動かし続ける。

「ほら、ただ舐めるだけじゃダメよ。舌を「中」に入れるように……そう、上手じゃない」

言われるままに、彼は舌を矢尻のようにピンと伸ばし、私の「中」へと押し入れていく。ぐいぐいと顔も近づけ、懸命に奥を舐めようと必至になっているその様子は、確かに犬のようだ。

「クリトリスって解る？ そこより上にある……そう、それよ。それも丁寧に舐めなさい」

僅かに突起した陰核。彼はそこを舌先でアメ玉を転がすように、丁寧に舐めていく。

「んっ、いいわよ……そう、上手ね。もっと舌で突いてみたり……そう、それよ。んっ、いいわ、もっとやってごらんなさい……」

私もいつの間にか、徐々に快楽の声を上げるようになっていく。それが嬉しいのか、彼は言われるままに陰核や陰門を舐め続けていった。

「んっ……もういいわ。ご褒美をあげるから、立って服を全部脱ぎなさい」

もう少し舐めさせても良かったかなあと気持ち少し尾を引いたけど、私は次へ進むよう促す。そして彼は言われるままに服を全て脱ぎ去った。

「あら、童貞の割りには「良い物」持つてるじゃない……皮もむけてるし」

全裸で直立している彼。私は彼のぶら下がった肉棒を手でチョンチョンといじりながら、感心していた。可愛い顔してこんな隠し持つてるなんて……ふふふ。

「あら？……あはは、でもやっぱり童貞君だね。こんなんでも良かった？」

軽く私にいじられた事、そして何より少女に全てを見られている事。それらが彼を興奮させ、そしてその感情は彼の肉棒へダイレクトに伝えられた様子。上へと向き始めた肉棒を、私は嬉しそうに眺めている。

「それじゃ、ご褒美ね」

そう言うと、私は小さな口で肉棒の先端をくわえ込んだ。唇はカリの部分を刺激するよう何度も往復し、そして舌先が尿道を突く。小さな手は彼の陰囊を優しく撫でるよう持ち

上げ、そして軽く揉み始める。

「ああ……お姉ちゃん……」

経験した事もない、快樂の大波。その攻めに耐えきれず、彼は快樂の声と共に思わず「お姉ちゃん」と口走る。止まった思考と壊れた理性では、もう私を「クランさん」とは見られないだろう。

「……いいわよ、私の事を「お姉ちゃん」と呼んでも。その方が気持ちいいんでしょう？」

私は姉として許可を下し、ご褒美を再開させる。この際私は、空いた方の手で棹を擦りだした。これで唇と舌、両手の四点攻め。童貞君にこのご褒美はさぞや夢心地に違いない。

「おっ、お姉ちゃん……もう……」

さすがに我慢出来ないわね。彼が射精が間近である事を私に告げてきた。しかし私はちらりと彼を見上げるだけで、まったく手も舌も唇も休める気はない。

「もう、でっ、出る……んっ！」

大量の白濁液が、私の口内になだれ込む。それを私は喉を鳴らしながら飲み込み、そして管に残る白濁液まで吸い出していく。

「……ごちそうさま。どう？……って聞くまでもないわね、あれだけ出したんだから」

僅かに口元から零れた弟の子孫を指ですくい舐め取りながら、私は見上げながら微笑んだ。この仕草、そして何より叶わないと思っていた夢が今、現実になっている。その事実が更なる興奮を呼び起こしたのだろう。彼の肉棒がまたそびえ起ってきた。

「早いけど、流石に元氣だけはあるわ。もうこんなにしてるなら、すぐに入れられそうね」

「そっぴいなながら、私はスカートをまくったままベッドの上に寝そべり、そして足を大きく開き彼に見せつけた。

「ほら、入れたいんでしょ？ お姉ちゃんの中に。いいわよ、遠慮なんかしないで早……」

んっ！」

私の言葉を最後まで聞くことなく、彼は自分の分身を姉の中に付き入れていた。そして私をしっかりと手で支え、狂ったように腰を動かし始める。

「もう、んっ、せっかちね……いいわ、その代わり、気持ち良く、させてよ……んっ」

彼は無我夢中で腰を振り、姉の中と、時折漏れる姉のあえぎ声に息を荒げていった。自分が童貞を失ったという記念すべき瞬間を忘れる程無我夢中に。

「そう、いいわ、もつと深く、そう……んっ、その調子、続けて、あっ、ん、いいわよ誠くん……」

なんだろう……テクニクもなくただ乱雑に腰を動かしているだけなのに……気持ちいい。これまでに感じたことのない、快樂？ 悦楽？ なにか暖かく心地の良い感情が私の中に溢れてくる。獣のような弟に抱かれ、私は幸福感に包まれている。

ただやはりというか……この感情は長く続かない。

「ちよっ、ん、もう逝っちゃったの？」

いつの間にか、彼は私の中に二度目の射精をしていた。それもそうか。童貞だったんだものね。

「まあ……仕方ないわね。どう？ 童貞を卒業できた気分は」

うなだれる彼を、姉は優しく慰めてみた。優しく？ ちよっと違うかな。でも……なんだか、落ち込んでる彼を見ると、更に愛しさが増してくるような。まるで本当に彼の

姉になった気分。

「……良かった……です」

息絶え絶えに口にした感想。たぶん彼の中ではもつと色々な感情が渦巻いてるんだろうけど……それを口にしろって方が無理ね。

「ほら、休む暇なんて無いのよ？ 仰向けに寝なさい」

でもここで手をゆるめる気はないわ。折角の獲物。折角、今までにない快樂を味わえるチャンス。絶対逃さない。もう私無しではいられないくらい夢中にさせるんだから！

言われるまま彼が仰向けに寝そべると、私は愛らしいあんよを懸命に広げ彼の上にもまたがった。むろん、またがる位置は腰の上。

「今度はお姉ちゃんがしてあげる」

手で彼の肉棒をしごきながら、私は不敵に微笑む。再び充分な堅さになる彼の肉棒……この肉棒は私の物、絶対離さないんだから……私はこれを、自ら自分の陰門へと導く。

「んっ！」

そして一気に腰を下ろした。

「ふふ、若いだけあって、ん、まだ元気ね……ほら、お姉ちゃんを、ちゃんと満足、させてよね」

二度も果てた彼と違い、まだ私は一度も達していない。それでも気持ちは十分に高まってきたし、今度こそ、私も満足したい。その気持ちが私の腰を大きく揺さぶらせ、私の腰使いに不慣れながら彼も合わせるよう下から大きく突き上げてくる。

「ね、服の上からで、いいから、お姉ちゃんの、胸、揉んで、ね、んっ」

私は自ら彼の手を引き上げ、自分の胸に押しつける。僅かに膨らんでいる私の胸を、彼はがむしゃらに揉み始めた。揉む、というよりさすっていると言った方が表現としては適切かな。たぶん手に集中すると、腰が止まってしまいそうなのを嫌っているみたいだから、うまく揉めないのね。もー、そんな不器用な童貞君が可愛いわあ。

「がんばって、もうすこし、だから、あっ！ いい、もっと、ても、んっ、こしも、うごかして……あはあ！」

私の声は次第に、喘ぎ一色になってきた。もう少し、もう少しで、私も逝ける……。

「いく、いけるわ、あんたも、んっ！ いき、いきなさい、あっ！ んっ、ほら、いくの、よ、ねっ、んあっ！」

私の中で、彼の肉棒がピクピクと跳ね膨らみと堅さを増している。三度目の限界がそこまで来ているのは確かだけど……まだ逝かないで、ちゃんと、ちゃんと私を悦ばせて！

「ほら、もっと、ん、いける、いく、いくから、ほら、んっ！ いい、いく、いくわよ、いく、いく、いく、いつ、んっ……んはあっ！」

ピクツと私が身体を震わせ背を反らせたのと、彼がベッドの上で背を反らせたのは、ほぼ同時だった。三度目だというのに、彼の射精は止め処ない。ああ、逝きながら射精されるって気持ちいい……一滴も逃すまいと膣に力が入り、彼の全てを快樂に変換していく。

「どう？ お姉ちゃんに二度も出しちゃった感想は？」

繋がったまま、私は感想を求める。が、荒い息ばかりで言葉が出ない様子。ふふ、そんなに気持ちよかったかしら？ なんだかそれが嬉しくて……自分が逝けたことと彼が逝けたことが、こんなにも嬉しくなるなんてね。どうしちゃったのかな私……こんな気持ち初

めて。なんだろう、この気持ち……幸せだけど、なんか怖い。怖い……そうね、この後のことを考えると、確かに怖いわ。

幸福感が一気に冷める。私は彼の腰から立ち上がり、まだ残っていた彼の精子を股に感じながら見下ろし、大切な「手続き」へと移す。

心が痛い……これは今までだって「客」達にしてきたことなのにな……なんでこんな罪悪感を感じるんだろう。

「随分気持ち良かったみたいね。それじゃ、その分キツチり頂く物は頂きましようか」
声のトーンが今までとは明らかに違う。流石に彼もそれを感じ取り、息を整えながら不思議そうに私を見上げていた。

頂く、という言葉でどんなことを想像しているのかな……彼の顔が引きつり悲しい目をし始めた。おおかた、金銭を要求されると思っっているのだろう。いきなりラブホテルだものね。事がうまくいきすぎたのは、私が売春婦だからだと、そう考えてるのかな……でもね、そんな優しいものでもかわいげがあるものでもないのよ。真実はもつと意外で、そして信じられない物だから。

「あなたの脳髓……たっぷり吸わせて貰うから」

ニヤリと口元をつり上げる。そのつり上げた口元が徐々に尖り始め、顔が形を変えていく。ホラー映画の最先端SFXでも見ている心地……かな、彼は。私の顔は、そして身体は、一羽の鳥へと変貌していく。

「大丈夫、すぐに済むわ。痛みを感じる間もなく、すぐに吸い尽くしてあげるから」

あまりの事に身体が硬直してしまったのか、彼は全く動こうとしない。唇も同じく。どう反応するのか……それで私の出方を決めるつもりでいた。普通は逃げようとするなり命乞いをするなりしてくるから、それに合わせ「脅し」をかけ様子を見て、客として迎え入れるか私の全てを忘れてもらっかを決めた。だから……この展開に私はちよつと戸惑っている。この姿だと戸惑っていることが彼に伝わりづらいのは幸いだけわ。

「……じゃあね。新鮮で良かったわ、誠くん」

このまま、私は行動に移す。鋭いクチバシを彼の脳天めがけ振り下ろす姿勢を保つ。

彼は……誠は、微笑んだ。

「ありがとう……良い夢が見られました……」

この状況で、その言葉？ どういうつもりよ……困るわよ、それ。私は迷い、しかしすぐ決断し、クチバシを振り下ろした。

こうなったらもう……仕方ないじゃない。

振り下ろす瞬間、流石に誠は目をつぶった。目をつぶったまま、しばらく彼は動かなかつた。

そして、時はそのまま流れる。

誠がそつと目を開け始める。

「もう……冗談よ」

クスクスと人の顔で笑い、私は目の前にいる弟を、人の手でギュッと抱きしめた。

私の手に掛ければ、男一人落とすのなんて容易たやすい事よ。そ、本当に簡単なこと。だから特別な事でもなんでもないんだけど……私は早速、ゲットしたその男を翌日店に連れてきた。別にね、連れ回したいとか側に置いときたいとか、そーいう事ではなくて……彼が「私の客」であるとホール長や店のみんなに知らせる必要があったから。ホント、そーいう事情があるだけ。だから別に、新しい客にみんなが「可愛い」とか言っているのを聞くのは、別になんともない。ホントに、だって当然のことだし。ただちょっと癪しゃくなのは、店の子たちにちやほやされてるこいつがも……いい？ 君は私の客なんだからさ。もつと堂々としなさいよ。なに顔を真っ赤にして照れてるのよ！

「クランちゃんにも、ちゃんとたお客さんが付いてくれて良かったわあ」
ホール長……まあいいわ。

ま、これで一通りの手続きは終わったわ。晴れて誠は私専属の「客」として店に認知され、誠はいつでも私を「買う」事が出来るようになる。誠にはもちろん、この店のシステムは当然、私の正体など一切合切を教える。流石に鳥の姿を見せてからだったから、私が妖怪だって事もすんなり受け入れたわね。

あー、そうそう。ついでにあいつらにも顔見せしてやらないと。

「あの、彼が「四号」なんですか？ 女王たん」

とりあえず私は、持っていたトレイで自称一号の頭を軽快に叩く。

「あんた達と一緒にしないの。この子は私の客だけど、あんた達と同じ変態奴隷とは訳が違うの！」

まず見た目からして全然違うでしょ。私は並んで座っている奴隷達を見渡して溜息をつく。技に走るしか脳のない汗だるま一号。力任せで強引な強面二号。どつちも足りない貧弱V3……なんでコイツだけ三号って名乗らないのかはさておいて……まあ、ビジュアル面だけでも既に天地の差があるって事を自覚しろ、自覚を。

「あの……鳥羽誠です……よろしくお願いします」

「なによ、その反抗的な目は」

誠が奴隷達に頭を下げ挨拶をしているというのに、なんだろうこの態度は。我が奴隷達ながらムカツクわ。すると一号がムスツとした表情のまま、指を指す。その先には、私と誠の腕。なによ、腕を組んでて問題でもあるって言いたいのか？

「扱いが違いすぎます……」

ボソボソとV3……ああもう、なんかめんどくさいから三号ね。三号が不満をぶちまけてきた。

「違って当然でしょ？ それくらい判らないのあんた達は」

判らないらしい。いや、判っていても不満なんだろう。三人が三人、眉間にしわを寄せあからさまな態度を取る。

「あつ……そう。なら、もうあんた達いらないわ。契約解除、この店の出入りも禁止ね」

この一言で椅子から即座にどき、床にはいつくばるようひれ伏す奴隷達。まったく、自分達の立場つてものを理解できないのかしらねえ。ついでに周囲の視線とか……まあ、店員や常連達には見慣れた光景になりつつあるけどね。それはいいとして、そうねえ……ま、

こいつらの気持ちがわからない私じゃないわ。それなりに「女王たん」してあげてるんだから。

「その程度で許されると思ってるの？ 今夜は三人まとめてお仕置きが必要ね」

三人が上げた顔の、まあなんとも小憎らしいほど笑顔に満ちあふれちゃって……目を輝かせてるこいつらはホント、DM以外の何者でもないわね。

「誠はどうする？ 参考までにこいつらの調教に立ち会ってみる？」

「いや、それはちよつと……」

苦笑いで拒絶する誠。まあ当然の反応よね。むしろここで「是非！」とか反応されても困るし。

「それに……天道寺さん？ お姉ちゃんがお世話になってるって……今日会う約束をしているから」

お姉ちゃんという言葉に、奴隷達がぐさま反応を示すが、私が睨みつけ黙らせる。そう、私は誠に「お姉ちゃん」と呼ぶことを許可してあげた。それが誠の性癖を刺激するんだから、夜のことを考えれば当然よね。

「あの無能保護者と？」

そういえば、誠の身辺調査を依頼してあったけど……結局無駄になっちゃったわ。本人からたつぷり聞けたし。まあだから、アレは無能で充分だわ。

「無能って……今朝連絡があつてね、「こつちの世界」に踏み込む際の注意事項とか、色々話したいことがあるって」

あー……そうね。一通り私のことかは話したけど、もうちよつと具体的な話を聞くのは確かに必要か。そーいうの面倒だから、あの保護者に任せただ方が確かに楽ね。余談だけど、誠のことは昨夜すぐに連絡したのよ。ゲットしたから調査いらなくて。なんか豪快に笑つてたアイツ……誠とはその時電話口で挨拶させて、連絡先なんかも教えあつてたみたい。

「判った。じゃそれ終わるの見計らつてアイツの館に顔出すわ。で……あんた達はいつものホテルで部屋を確保して待つてなさい」

誠はアイツに任せればいいし、こいつらは……ま、昨日たつぷり誠と楽しんだし、適当にあしらつてやればいいか。そ、適当にね。私にも女王としての「慈悲」くらい見せてあげないとね、たまにはさ。

「もう準備は良いみたいね」

私はホテルで大人しく待つていた男達を、全裸のまま正座させ並べている。私はと言うと、男達のリクエストに応え「全裸にエロメイド服」という姿。メイド服と言つても、生地はラテックスだし露出度合いから言つてボンテージつて方がしっくり来るけど……あくまでメイド服、なんだつて。こいつらに言わせるとね。エロメイド服を着た幼女に、調教される。そのシチュエーションがたまらないらしい……まあ、こんなの今に始まった事じゃないから良いんだけど……むしろ色んな衣装をねだられて、最近は悪い気しないのよね……それつてちよつとヤバイかな？ まあとりあえず、これくらいのリクエストには「女王たん」として答えてやらないとね。

「なに、もうそんなにしてるの？ 毎回毎回、本当に呆れるわ」

三人の肉棒は既にはち切れそうなほど膨張し、天に向かってビクビクとそそり起っている。

「それじゃ、始めて」

私は三人の前に椅子を置き、そこに座った。男達に向け足を広げ、私の秘所が見えるように。そして男達は、自らの手で肉棒をしごき始める。目の前の私を「オカズ」に。

「ふふ……どう？ 私のオマンコは」

「はい……ハアハア……とつても、キレイです」

「いつ見ても、たまりません……」

「ああ、女王たん、女王たん……萌えます、ハアハア……」

私の問いかけに、荒く息をしながら答える男達。

「相変わらずボキャブラリーの無い……まあいいわ。ちゃんと答えたから、ちょっとご褒美ね」

両手の人差し指で、私は自分の淫唇を軽く広げてみせる。するとどうだろう、男達はより手を激しく動かし始めた。ホント、単純な奴ら。こんなですぐがんばっちゃうんだから……。

本番前に自慰をさせる。これは最近やるようになった、まあ儀式みたいなものかな。目的は単純に、先に出させて次を長持ちさせるため。私が手や口で抜いてやってもいいんだけど、面倒だし。それにこいつた屈辱的な自慰行為をさせる事が彼らにとっては精神的な悦楽なんだから。私としても長く楽しむための下準備ができて、お互いに都合が良くてわけよ。

「必至ねえ……ほら、頑張りなさい。ご褒美は目の前よ」

更に私は淫唇を広げ、男達を悦楽へ誘う。私は別に男達の自慰を見て興奮する事はないけど、まあこれも「女王たん」としてのサービスかな。

「今日は……そうねえ。先に逝った奴から好きなどころを舐めさせてあげようかな？」

あはは、更に激しくしごきだしたよこいつら。ちょっとおかしくなっちゃうくらい……そして本当にちよつとだけ、可愛く見えてくるわ。

「く！」

射精大会の一等は、どうやら一号になりそうだ。彼は慌てて立ち上がり、私の元へと駆け寄ってきた。

「相変わらず早いな。早すぎるのは本来……こら、慌てるな！」

椅子ごと私を押し倒そうかという勢い。そして勢い余り、コイツ、あろう事か私の顔めがけ飛ばしてきた。

「あ、す、すみません！」

本来なら、射精は私の口の中しなければならぬ。むろん、折角の精気を無駄にしないために。必死に謝る一号だが……。

「まさか、顔射したくてわざとやったのか？」

他意は無かったけど、結果としての顔射に興奮してるのがコイツの焦りようでありありと判る。私は顔に掛かった白濁液を指ですくい、それを口に運ぶ。その様子を見下ろしながら、一号は息を荒くしている。どうしようもない奴だな……これは罰を与えないとね。

「……褒美無し。そこに立ってる」

普通のSMなら、罰も一つのプレイなのだろうが、私はこれをプレイにするつもりなど無い。あえて言うなら放置プレイ？ なんにしても、このようなハプニングを狙うようになっては示しがつかないからね。一号は大人しく、私から少し離れ軍隊よろしく直立したが、それでも軽く肉棒まで立たせてるんだから……本当にどうしようもない男だよ。

そんなことをしている内に、三号が立ち上がり私の元へとやってくる。興奮しながらも慎重に自分の肉棒を私の口元へと差し出す。私が口を開き軽く亀頭を唇で挟んだとたん、勢いよく喉へ子種がまき散らされた。私は軽く咽せそうになりながらも、喉を鳴らしながらその子供達を飲み込んでいく。

「いいわよ、好きなところを舐めなさい」

真つ先に三号はしゃがみ込み、私の股間に顔を埋めた。まずは舌先で陰核を突く。そしてゆっくり力を入れ初め、すくい取るように舐め上げる。

「んっ……だいぶ上手くなつたわね」

私に褒められ気をよくしたのか、三号がしばらく陰核を舌で攻め続けた。まったく、ちよつと褒めたらこれだもの……単純な攻めを繰り返すだけじゃ、技術は向上しないんだね。

「はあ、やつと……」

二号がようやく私の元へとやってきた。三人の中では一番遅漏なんだけど、それでも一般男性よりは早漏かな？ まあ、私の陰部を見ながらの自慰なんだから、早くても当然なんだけだね。

私は二号の精子をたつぷり口に含み、奴に目で合図を送ってやる。すると二号はすぐさま乳頭にむしゃぶりついてきた。唇で小さな乳輪を覆い隠し、舌先で乳輪の先を小刻みに舐め続ける。

「お前もいいぞ……ほら三号、「そこ」だけでいいの？」

陰核ばかりを舐めていた三号は、舌を僅か下にずらし、より顔を埋め、陰門へと舌を押し入れてきた。クチュクチュと、湿った音が漏れ始める。まったく、言われないとこれだからコイツは……夢中になるのは相手が私だもの、当然といえば当然なんだけど、もうちよつとさ……どうすれば相手が悦ぶのかとか、そういうところに気を回せないのかな。

「いいぞお前達……どうした一号、今にも泣きそうだな」
まったく、叱られて立たされた子供そのものだな。

「ごめんなさい女王たん……もうしませんから、舐めさせてください……」

台詞も子供だな。ただ身体は大人か……肉棒は先ほどよりも張りが出ている。

「しょうがない奴だな……特別に尻を舐めさせてやっても良いぞ」

女王としての慈悲を見せてやる。一号は満面の笑みで礼を言うと、私が座る椅子の下へと素早く潜り込む。正直……そろそろ菊座への刺激が欲しかったところだったのだが、むしろそれを悟られるようなことはしない。これはあくまで、私の慈悲なのだから。女王としての風格は保たねば私の気が済まないし、なによりこいつらがっかりしてしまうからね。

椅子はちょうど尻の部分が空いている作りになっており、私が座ったまま尻を舐められるよう出来ている。とはいえ、直接尻に顔を埋めるには辛く、なかなか奥へ舌が届かない。

周囲をレロレロと舐めるだけに止まっているのがなんともじれたいが……かえって私は興奮してきました。

「……ん、三人とも、上達したわね……だけど、まだまだよ」

軽く喘ぎ声が出そうになるのを、私は抑えた。客にしてやって奴隷として傳かしずかせてやったばかりの頃に比べれば、随分と上達はしている。とはいえ、充分ではない。まったくない。まだまだ物足りないけど……こいつらはとにかく、一途な程に懸命だ。それがちょっとだけ、本当にちよつとだけ、かわいげがあるかなと、思う。

良くも悪くも、のめり込みやすいのがオタク。それが良い方向へと向かっていると解釈しているのだが……まあ人間社会に置いて、これが「良い方向」かどうかはなはだ怪しいが。

「なに……もう我慢出来ない？」

私は二号の、先ほど以上に膨張している肉棒をベチツと手で軽く叩いて言った。

「はい……我慢できません。女王たん、そろそろお慈悲を……」

我慢出来ないのは、むしろ私の方。まだまだ未熟だけど、三人がかりで私に肉体的快楽を与え続けているんだからね。

「そうね……まあいいわ。そろそろ入れさせてあげる。でもその前に……ほら、準備なさい」

私の言葉に、三人はすぐさま舌を離し、そして「定位置」に立った。入れさせる前に、私はいつももう一度射精させている。ただし、今度は私の手と足で。陰門を舐めていた二号は股間をこちらに向け寝そべり、肉棒を私の両足に挟まれている。残った二人はそれぞれ私の脇に立たせ、手でしごいてやる。

「攻めるのは上手くなってきたけど、攻められるのは相変わらず弱いわねあなた達」

「すぐにもまた射精しそうなのが、ビクビクと跳ねる脈を直に触れる事でよく判る。」

「良いわよ、そのまま出しちゃいなさい」

言われて三回もしごかないうちに、三人はほぼ同時に白濁液を放った。足下で放たれた白濁液は私の股を汚し、手にしていた二本の肉棒から放たれた白濁液は、私の顔に勢いよく降りかかった。むろん今回の顔射は許可済み。私は顔にかかったその白濁液を拭いてもせず、口元に掛かったものだけをペロリとなめ取った。その様子を、三人はじつと凝視していた。

「こんな子供に逝かされるなんてね。そしてこんな子供の中に入れていだなんて……本当に、あなた達って変態よね」

何度も何度も言われ続けている罵倒。それなのに、それだから、彼らは興奮している。

「出したばかりなのに、もう固くして。流石変態ね。いいわ、入れてあげる」

私は肉棒から手を離し、椅子から立ち上がった。寝そべったままの二号に近づき、股を開きまたがる。二度そそり起つ二号の肉棒。それを陰門まで導き、私は一気に腰を落とす。

「んっー」

思わず、声が出てしまう。そんな私の声に、三人が明らかな反応を示すのはいつもながら見ていて面白い。大人としては平均的なサイズだが、幼女の身体を持つ私には大きい肉棒。既に充分濡れていたとはいえ、キツイ。にも関わらず、私はこれ以上を求めていた。

「さあ、良いわよ……」

二号の上に覆い被さるよう寝そべり、尻を突き出す格好になる私。三号が私の尻、その奥にある孔あなにローションを塗る。そしてその手を拭き取る間も惜しみ、ぬめる手で尻を掴み、肉棒を尻にあてがう。

「くっ！」

私は自分の中に、二本の肉棒が差し込まれているのを感じている。ああ、ようやく手に入れた快楽。苦しみながらも、私はこの感触を楽しんだ。

「ほら、動かしなさい」

言われて動く、二人の腰。奴隷としての連携はかなり取れるようになってきた。二人の腰は息を合わせ動かされている。前後の肉棒が同時に押し込まれ、肉棒同士が私の中で肉の壁を隔てぶつかり合う。

「くっ、あっ、いいわよ……ほら、あなたのも……」

残された一号。彼の肉棒を私は招いた。眼前に突きつけられる肉棒。私はそれを手に取り、口へと運んだ。

「んふっ、クチュ……んっ、チュツ……はふう……んん」

三点攻め。穴という穴を、私は攻められている。そう、私は攻められている。やっと、私は快楽を受け取る側へと回った。突き入れられる肉棒。擦られる肉棒。かき回す肉棒。三本の肉棒、私によって鍛えられた肉棒が、私に快楽を与えてくれる。当然こいつらも、膣、肛門、口内という天国を味わっているわけだ。

「は、いいわ、もつと激しく、もつと、ん、クチュ、んチュ、はふ……」

狩りで手に入れる男は、非力で私からの快楽を受けるばかり。だけどこの男達は私が育て、私に微力ながら快楽を与えるようになった奴隷達。まるで放牧……モンゴルで行われる放牧。囲いの中で好きにやらせつつ私がコントロールする、そんな放牧。そうして育てた肉棒達が、ここにそろっている。

「いい、いく、そろそろ……ん、んチュ……んん、いく、いくわね、い、いいわよ！」

あくまで逝かせてあげる。その態度を崩してはならない。これから忠実な奴隷を手元に残しておくのなら、女王であるこの立場を見せつけないと。攻められてはいるが、むろん私も彼らに持てるテクニクを駆使して答えてやっている。締め付け、擦り、舐め上げる。先に二度出していなければ、とつくに根を上げていたはずだ。そう考えると、彼らはまだまだ成長過程が。

つまり……これ以上の快楽も期待できるのか？ そうならば……ふふ、またちょっとだけ、本当にちょっとだけなただけど、こいつらが僅かながら可愛く見えるわね。

「ん、い、いくのね、さ、い、一緒に、ん、んチュ、んふ……ん、ん、んん！」

脳天に電撃が走る、そんな快感。それは三力所の穴に白濁液が注がれた瞬間でもあった。

「ん、はあ……良かったわよ、あなた達」

私は素直に、三人を褒めてやった。息も絶え絶えながら、恍惚とした表情を浮かべる三人。私は彼らのそんな顔を見て、微笑んだ。

「さあ、次行くわよ。ポジション替えなさい」

恍惚の表情が、多少引きつる。だが、「女王たん」の命令は絶対。三人はお互いの場所を替え待機する。

「そうだ……これは「お仕置き」だったわね」

私の言葉、その意味を理解したのだから。またしても三人がピクリと反応する。

「あの……女王たん。あまり無理をされては……」

「あら、私が無理をするほど愉しませてくれるのかしら？」

あくまで私を気遣って、という姿勢で説得しようとしたんだろうけど、墓穴よね。

「お仕置きなんだから、つべこべ言わないの。そうね……あんた達の誰か一人が倒れるまで。それくらいで許してあげる」

それじゃ物足りないんだけどね。奴隷達は顔を引きつらせ身を強張らせ、でも肉棒を起したせ息を荒げ、女王への奉仕を続けていく。

「……ずいぶんとまあ、晴れやかな笑顔だな」

「そう？」

学者先生に聞き返したけど、自覚はしている。たぶん、ついさつきまで愉しんできたから……というのもあるんだろうけど、なんだろうね、我が弟君の顔を見たら、自然と自分の顔が綻んでくのが判った。んー、自分でもちよつと、これほど一人の男に入れ込んでること自体に戸惑いを感じてるんだけど……彼を前にすると、その悩みはすぐに忘れてしまふ。まあ、単純に「滅多にない掘り出し物」を手に入れた事への、満足感なんだろうけどさ。

「誠君には色々、「こつち側」のルールとか一通り教えたところだ。誠君は理解力に優れてて、教えるのが楽だったよ」

「いや……ははは」

誠が照れ笑いを浮かべてる。んー、私奴隷が褒められるのは、主あまじとしても嬉しいわね。まあ、これだけの良作だもの、当然だけど。

ただ気持ち悪いのは……私が喜んでるのを見ながら、目の前にいる張りぼて水風船フェアリードクターと妖精学者がニコニコと笑ってるのがね……なんなのよ、その笑顔は。

「それでね……誠君から彼のお姉さんの話を聞いたんだけどさ」

ん、なんかその話……聞きたいような聞きたくないような。なんでだろう？ 誠のことだから興味あるけど、誠の本当のお姉さんの話って……んー、まあどちらにせよ、私の意志は関係なく勝手に保護者が話し始めてた。

「彼のお姉さんは彼が七歳の時に、モンゴルで亡くなったそう。死因は落馬。事故死だな」

「えっ、モンゴルで？」

さすがに私は、この話に思い切り食いついた。テーブルに小さな身を乗り出し、詳しい話を急がす。

「それも北側の地方だったらしい。つまり、ボリヤド民族のいる地方だな」

それって……つまり、私達モー・シヨボーの故郷でって事？

「本当なの？」

問いかけは、二人の男達に投げかけた。二人共が、首を縦に振る。

「お姉ちゃんの話……モー・シヨボーの話は全く知らなくて……ボクが天道寺さんに聞か

れるまま答えたら、なんか、そーいう事らしくって……」

「そーいう事って……どーいうことよ」

判っていないながら、私は尋ね返す。そんな……だって、ねえ？

「君の前世は、彼のお姉さんだった可能性が……かなり濃厚だって事だ」

くらくと来た。めまいというか……なに、この感情。シヨック？ ううん、シヨックはシヨックだけど……嬉しいの？ いえ……うーん、なんだろう……なによ、これ、なんなのよ。

「でも……私は……モー・シヨボーなのよ。前世とか、関係ないわ」

そう、関係ない。全く……全く、関係ない。私達モー・シヨボーは、愛を知らずに死んだ女の子が変化した妖怪。生まれ変わった際、私達は前世……人間だったときの記憶は一切失う。記憶の問題だけでなく、もはや妖怪なのだから……人間だった頃の話は、もう、関係ないのよ。そう、全く関係のないことなの……。そうやって自分に言い聞かせるのが、なんか悲しくなってきた。

「でもやっぱり……ボクにとって、お姉ちゃんはお姉ちゃんだ」

誠がまっすぐに私を見ている。やだ……そんな目で見ないでよ。私は、もうあなたの姉じゃないんだから……もう？ もうって何よ……そう、そうよ。別に確かな証拠のある話じゃないし……だって、今更……。

「ま、認めるとか認めないとか、真実がどうとか、気にしなくていいだろう」

コイツ……私がこれだけ動揺してるってのに、なに軽うく言っちゃってんのよ。ムカツクわ。保護者名乗るなら、もうちょっとそれらしく接しろ！……ていうか、なに動揺してるのよ私……。

「誠君は君のことを姉と思い慕っている。それは君と出会ってからのことであり、今回のことが判ったから彼が慕い始めたわけじゃない」

慕ってる……の？ まあ、うん、そうね……シスコンでロリコンの誠が、私を慕うっていつか、まあ、そーいう目で見るのは別に、うん、判らなくもない……わよ。

「君は君で、誠君が誰であれ、「可愛い客」なんだろう？ 特別扱いしたくなるほどの。なら別に、過去がどーかは気にする必要はない」

なら初めから話さなければ……いや、知らせてくれたからちょっと……あーもう！ なんなのよ、もう！

「いいよね？ ボク、このままお姉ちゃんをお姉ちゃんって呼んでも……」

「モー、あー、いいわよ！ 勝手に呼びなさい！ 誠は誠で、その……ね、私にとっては、なに、その、さ……そう、弟みだいに可愛い奴隷、うん、そーいうことだからさ……はい、これで良いでしょ？」

なんなのよ……まったく、このピア樽野郎！ ニッコニコしてんじゃないわよ！ 誠もなにその……うん、可愛い笑顔で……うん、そりゃ私もさ……うん……。

「まあ関係ないとは言っても、俺としては……ちょっとクランの「偽装住民票」とかを作るのに、誠君のお姉さんの名前を借りたいんだ。誠君には了解をとったけど、クランも別に構わないだろ？」

「あーはいはい。もう、好きにして良いわよ」

別に今更そんなもの必要じゃないけど……保護者としては色々あると便利なんですよ？

もう、勝手にしてよ……。

「オーケー、なら決まりな。クラン、君の日本名はこれから「鳥羽愛」になるから」

「ちよっ、なに、「愛」って!?!」

「コイツ……これか、お前がずっとニヤついていたのはこれか！ よりによって愛って……愛を知らないモー・シヨボーの名前が愛ですって？ なんの冗談よ！」

「ダメ、流石にそれは却下!!」

「おいおい、好きにして良いって言ったのは君だろう？ 誠君も愛お姉ちゃんの方が嬉し
いってさ」

「いや、あははは……」

「そこで誠を引っ張り出すな！ もう、そんな笑顔されちゃ……うー、なんでよ、なんで
私、こんなに誠の笑顔に弱いのお！ なんか、色々狂ってるわ……もう！」

「……ブラコンめ」

「ぼそつと、でも聞こえるように、ニヤついたオークが言い放つ。それを聞いた私は、椅子の上に立ち頑固親父よろしくテーブルをひっくり返していた。」

「間違ってる、世の中が間違ってるんです！」

数ある客席の一つから、荒げた声がする。

「いいですか、ツンデレとは本来そのような軽いものなんかじゃないんです！顔を赤らめながらちよつとどもりがちに突き放した言い方をする、それだけでツンデレなどとは笑止千万！そんなね、形式張ったものでツンデレを語って欲しくないんですよ。本物のツンデレというのは、もつと殺伐とした、そんな中でも愛……」

「店内で騒ぐな！」

テーブルに片手を突き誠の方へ身を乗り出しながら興奮していた奴隷一号の後頭部に、パソコンと軽快な音を立て銀トレイを見事にヒットさせる。

「他の客に迷惑だろうが。まったく……」

叩いた銀トレイを持ったまま腰に両手を当て睨みつける。さして強く叩いた覚えはないが、叩かれた一号は僅かに涙目となりながら後ろにいる私の方を振り向いた。

「じよ、女王たん……」

まったく……声を荒げて話すことか？そもそも、そんな下らない話を誠にするんじゃないわよ。

「はは、ゴメンお姉ちゃん……」

苦笑いを浮かべながら、誠が私に謝罪する。見ようによつては誠の方が被害者って気もするんだけど、まあ同席してるから同罪なんだと思ってるんでしょね。ホント、この子は律儀なんだから。

誠は気が弱い反面、氣立てが良い。誰彼となく低姿勢で優しく接し、すぐにうち解ける事が出来るようで……私と出会い、この奴隷一号や店のみんなと顔を合わせるようになってから、たった数日という短い期間でもうとけ込んでいる。最初の内は私も私達の保護者も、妖怪だの妖精だの妖魔だの、そんな連中が集うこの店やこちら側の世界で落ち着いた生活が出来るのかどうか不安だったんだけど……なんて事はない。むしろ楽しんでるようにも見えるわ。

「まったく、何しに来ているんだお前達は。騒ぐならとつと出ていけ」

楽しむのは良いんだけどね、誠……こんなのに染まらないでよ？お姉ちゃんそれが心配だわ。

「そんなあ、折角女王たんのメイド姿を拝見つかまつるため、いざメイド喫茶とはせ参じた拙者にそのようなご無体を……」

「日本語で話せ」

これだからオタクは……カッコイイと思ってるのか？その妙な言葉遣い。

「まあまあ……うん、それにしても似合ってるよ、お姉ちゃん」

一号への矛先を反らせてやるためののか、それとも、その……なに、私のこの格好を本気で褒めてるのか……うー、弟を前になに照れてるのよ私は。

今日私は普段のゴスロリ衣装ではなく、当店標準衣装であるメイド服を着ていた。誠が是非一度見てみたいって言うから……うー、あのゴスロリはある種の「戦闘服」と思っ
て着てるから普段恥ずかしくないんだけど、こーいう着慣れない、それでいてあからさまな

衣装は……ここが狩り場の路地裏とかなら、まだいいんだけど……。

「なによ、あまりジロジロ見るんじゃないわよ」

「折角着てくれたんだもん。見ないわけにはいかないよ」

「この……可愛い顔してそんな事言われたら……」

「そーっすよ！ いや、流石女王たん！ 何を着ても萌えます！ 萌え萌えです!!」

……ありがとう、一号。あなたのおかげで吹っ切れた。誠からの視線は気になるけど、

お前や他の人達からの視線は慣れてるからどーでもいいわ。そもそも、萌えとかそーいう感じに男を欲情させるのが本来の私なんだしね。

「ならじつくりお姉ちゃんの事見てなさいよ、誠。それとも、もっとこのへんをじっくり見たいのかな？」

一度吹っ切るとなんのことはない。私はスカートの裾を掴み、ゆっくりと持ち上げていく。スカートと白いニーソックスの間にある素足の部分、一号達の言う「絶対流域」の部分がより広がっていく。

「あー、その、いいよ、無理にそんな……」

ふふ、顔真っ赤にしちゃって可愛いわあ。そうそう、やっぱり誠は私にからかわれてこそかわいげがあるというものよ。

「おおおおー、いやはや、素晴らしいです!」

いや、お前はどうでも良いから、一号……柏手かしわてを打つな、拜むな!

「……ともかく、騒がないで。もうすぐ終わるから、誠はもうちょっと待ってて。一号は消えろ」

「うう、その扱いは酷いです……」

「ははは……」

酷いも何も、本音だ。お前がいなければ私はもつと誠といちゃ……ん、まあ、ともかく私は二人に嚴重に注意し、仕事に戻った。戻るところでホール長や同僚達と目が合う。なによその目は……はいはい、もー好き勝手に言っくなさいよ。何言われたってね、もう慣れたわ色々。私も誠もね。

あれから二号も三号も来店し、店内にはトレイの音が高らかに五発は鳴り響いたかな。まったくあいつらは……いちいち騒ぎすぎなのよ。そもそも、このメイド服は誠が見たいって言うから着ただけで、あいつらに見せるためではないのに……まったく。そもそもあいつら、これよりもつと露出度の高い服ならいっばい、それこそ露出度高めのメイド服ならこの前見せてあげたばかりじゃない。あいつらが言うには、それはそれ、これはこれ、だそうで……まったく、なんだろうね。男っていうのはホント……。

「あの……お姉ちゃん。もう充分見せて貰ったから……着替えないの？」

仕事も終わり、私は店の外で待っていた誠と合流した。その誠が、こともあろうにその誠が、メイド服のままできてあげてるのに不満を口に出している。店内で大騒ぎしていた奴隷達とは真逆の反応だ。まあもちろん、誠だって店内では嬉しそうにしてたけど。

「あら、つれないわねえ。あなたが言うから折角着たのに、もう脱げっていうの？」

私は誠の腕に抱きつきながら、上目遣いに尋ね返した。

「だって店の外でそれは……恥ずかしいよ」

顔を真っ赤にして照れる誠。くー、この反応が初々しいわね。ふふ、もつと恥ずかしそうな顔をたっぷり見せて貰うんだから。

「仕方ないじゃない、私この服を着たまま店に来たんだもの。他の服なんて無いわ」

着替える以前の問題なのよ。家からこの格好で出てきたんだからね。そもそも、私は服を何着も所持していない。家を持たなかった私は当然自分のクローゼットがあるわけでもなく、男を狩るために用意した服を三着所持していた程度。それをずっと着回していた。ちなみに洗濯などは保護者の屋敷でやってたわ。プレイ用のコスプレなんかは奴隷達が用意したのを着てただけだしね。

「この前一緒に買いに行っただじゃないか。普段は出来るだけ、普通の格好しててよ」

「そうだったわね。すっかり忘れてたわ」

もちろん、嘘。私だっていくら妖怪でも人間社会の常識くらい知ってるわ。単にこれは、誠を困らせるためだけにしているだけ。ついでに……。

「あーそうだ。こつちを**はく**のも忘れちゃった」

チラリと、スカートをめくり中身を誠に見せる。いや、**中身が無い**ことを見せる、と言うべきかな？ そう、私は今下着をはいていない。

「ちよっ、お姉ちゃん、いくら何でもそれは……」

「ほら、早く帰らないと大変よ？ ノーパン幼女を連れ回してる姿なんかお巡りさんにも見つかったら、職務質問されて……あらあら、誠君は変態さんとして逮捕されちゃうわねえ」

ゆだったように顔から首から真っ赤にした誠が、急ぎ足で私を連れて歩き出す。

「あらダメよ、そんなに急ぐとかえって怪しまれるわよ？ そうそう、普段通りゆっくりね……ふふ、みんなに見られてるけど気にしちゃダメよお？」

クスクス……もー誠ったら可愛いわあ。立場が立場なら、この「羞恥プレイ」は私がされてる側。だけどこの場合、受けているのは誠の方ね。メイド服を着せた女の子に腕を組ませて連れ回す、これだけで充分目立つのに、私が下着をはいていないのがバレたら……ん、私まで興奮してきちゃった。誠とは全く違う理由で、私も早く帰りたい心境になっていた。

「あー疲れた」

家に帰り着き、私は早速真新しいダブルベッドに身を投げる。ここは**私達**の家。誠は両親と離れ一人暮らしを始めていたので、私達の保護者の提案もあり二人で住めるマンションへと引っ越してきたばかり。誠の両親へは保護者から上手く話を通して貰ったんだけど……私のことは上手く誤魔化しながら、よく納得させたわよね。あんな**体型**でも、やることはやるから……侮れないわ。もちろん私達としては助かってるけど。

「まったくあいつらはもう……もつと静かに出来ないのかしらね」

ベッドの上で私は仕事の愚痴をふと漏らした。もちろん、意図して道中のことには全く触れない。

「……ふう」

誠はといえば、家にたどり着けた安堵感から大きく息を吐き出していた。彼も疲れたでしょうね……肉体的にはなく、精神的に。

「あら、何が不満なの？」

「……お姉ちゃんの意地悪」

恥じらいながら私を睨みつける誠……もー、そんな誠の顔が可愛いわあ。頼なんか膨らませちゃって。

ホント……こうも一人の男に入れ込むようになるとは思わなかったわ。プラコンとか言われるのは癪^{しやく}だけど……そもそも誠が弟だったとかそーいう話はもう……どうでもいいわ。ただ私は誠が気に入って、誠が私に惚れている。それだけでいいじゃない。

「可愛かったわねー、ずうっと下向いちゃって、顔真っ赤にしちゃってさあ」

「酷いよお……」

口を尖らせてまだ不満を言う誠。仕草が子供っぽいのよねえ……そこが可愛いんだけど、二十歳の青年だって自覚はあるのかしらね？ そうそう、誠は二十歳の大学生だったのよ。少年以上青年未満っていう印象は、当たらずしも遠からずってところだったのよね。

「でも嬉しかったでしょ？」

言葉に詰まる誠。クスクス、もう、本当に素直な反応するわねえ。

「お姉ちゃんがだあい好きな君は、とおっても嬉しかったでしょお？」

口を尖らせまだ不満だという態度は残しつつ、軽く頷く。こうも素直だから、また虐めなくなっちゃうのよね。ホント、誠のおかげで自分がここまでサディストだったんだって知ることが出来たわ。

「メイド服のお姉ちゃん可愛らしかったし……腕組んで歩けたのも嬉しかったけど……でも、その、下着ははいてよお願いだから……」

ちよつと涙目。うーん、ここまで行くとやりすぎたかなあってちよつぱり反省するわ。

「判った判った。誠が可愛いからつい虐めたくなっただけ。今度からはちゃんと下着はくから……それよりほら」

すつと、スカートを持ち上げる。下着をはいていないお尻がチラリと見えているはず。それを誠が凝視し始めた。

「興奮しちゃって収まりつかないでしょ？ ね、折角だからこのまましちゃお」

収まりつかないのは、私も同様。誠のために下着をはかないままだったけど、それは流石に私だって恥ずかしかったし興奮した。それにこんな可愛い誠を見ていたら……したくなつて当然じゃない。

「ほら、裸になって横になりなさい……あ、そうだ」

いつものように命令口調で誠に指示を出したところで、私は閃いた。

「裸になって横になってください、ご主人様」

「はい？」

内容は同じだが、口調を変えた。これには誠も眉をひそめている。

「メイドの私が、ご奉仕いたしますわ」

そう、折角だからこういうプレイをしようかなって。普段「女王たん」なんて呼ばれる私がメイド役に徹してみるのも悪くないんじゃないかな？ 男を狩るときなんかは大人しい女の子を演じるけど、メイドは私も経験がないし、新鮮で刺激のかもしれないわ。

ほら、誠もまんざらじゃない顔してるわ。

「まあ、ご主人様つたらもうこんなに……」

顔だけじゃなく彼自身とつても素直。早速裸になった誠、彼の肉棒は既に硬くなっており、力強くそそり起っている。それを見て私の口元が自然とつり上がる。

「ではご主人様、ご奉仕させていただきます」

言うなり、私はベッドに横たわった誠に近づき……彼の息子に触れる。
足で。

「ちよつ、お姉ちゃん」

「丹誠込めて「足コキ」させてもらいます」

ベッドの上に立ち、私は誠の息子を足で踏むように乗せ、そしてゆっくりと動かし始めた。これをご奉仕と言えるかどうかはさておいて、白いニーソックスをはいたままされる足コキに、誠は戸惑いながらも息を僅かに弾ませてきた。素手とは違う感触、こそばゆい肌触り、微妙な足の圧迫……上下にゆっくりとこすられ、先ほども息子はすすくと成長を始めている。

「あらあら、ご主人様はとっても感じやすいんですね。もうこんなに大きくして……ご主人様は恥ずかしくないんですか？」

優しい口調で言うてはいるけど、ニヤニヤと笑いながら言い放たれる私の言葉はその口調と釣り合って無いわね。うーん、どうしても地が出ちゃうわ。でもまあ、これはこれでなんか良いかも。

「ではもつとご奉仕してあげますね」

私は軽く開いた足の間に腰を下ろし、両足で息子をはさみ、不規則に足をこすり合わせる。絶妙な摩擦と圧迫、時折親指でカリを刺激するなどのテクニクも織り交ぜながら、丹念に誠と彼の愚息を愉しませる。

「うっ……」

効いてる効いてる……うっ、気持ちよさそうな顔しちゃってもお……そんな顔されたら、虐めたくなっちゃうじゃない。

「このくらいでよろしいですか？」

突然、私は足を止める。あと僅か、刹那もあれば爆発するという直前になって。その上でよろしいですか……あはは、誠つたら切なそうな顔しちゃって。

「も、もうちよつと続……」

「ではご主人様、次はわたくしめにご褒美をくださいませ」

……あ、涙目。大丈夫よ、ちゃんとフォローはしてあげるから。それより……私がダメなのよ。こつちが我慢できないの。私は手早く誠の顔をまたぎ、スカートをまくり、腰を僅かに落とす。

「さあご主人様、早く舐めてください」

下着をはいていなかったから、誠からは既にぐっしりと濡れた私の淫唇が丸見え。口とは裏腹に、私がずつと興奮していたことがこれではばれてしまった。

「なんだ、もうこんなに濡らして。お前は本当にいやらしいメイドだな」

だからかな。誠がご主人様の役へ積極的に乗り出した。台詞口調とはいえ、誠の言葉に私は頬が熱くなるのを実感する。誠からは見えていないだろうけど、たぶん、誠も私がど

んな顔をしているのかくらい想像できているんだろうな。だって、私が何も言わず強引に腰を落とし私の淫唇と彼の唇とでキスを迫ったから。これが照れ隠しだって、すぐに判っちゃっわよ。

「んっ、そ、いいわ、ご主人様……」

誠の舌が淫唇へ、そして中へと触れ、レロレロと動き回る。まだまだテクニクと呼べるような舌使いじゃないけど、私は敏感に反応してしまった。それに気を良くしたのか、誠は舌を動かしながら手を私の尻へと回し、軽くなで回す。

「あつ、それ……もつと強く」

自分から腰をもそもそと少し動かしながら、強請ねだつてしまう。そんな私の態度に誠の中でどんな感情がわき起こったのか……普段の彼らしからぬ行動に出てきた。心をくすぐら「ひっ、ちよっ！ も、いきなり！」

コリツと、軽く歯で小さな陰核をいじる誠。敏感になっている陰核にそんな事されたら、私だつて声を上げるわ。誠はその陰核をケアするように、今度は舌で嘗め回してくる。それがむしろ激しい刺激になって私の全身を小刻みに振るわせてくる。

「やつ、やるようになったわね……いい、そこ、もうちよつと大胆に……」

言われるまま、誠は舌を大きく使つて陰核と淫唇の表面を嘗め回す。トロトロと流れ出ている愛液が彼の唾液と混ざり、ピチャピチャといやらしい音を立て私の耳に届く。その音にまた私は興奮し、誠へ私のジュースをどんどん注いでいった。

こうなると……私は誠のジュースが飲みたくなってくる。

「ご主人様のも……あは、こんなにしちゃって」

本当ならこのまま身体を倒し舐めさせたまま誠のを舐めたいところだけど……残念ながら私の体型は幼女。残念ながら口は届きそうにない。だから私は、精一杯手を伸ばして誠の肉棒を掴んだ。

「ご主人様も気持ちよくなつて……ん、ビクビクしてる」

先ほどまで足コキをされていたのもあるのだろう。ビキビキと音を立てそうなほどに誠の肉棒は硬くなっていた。もう後数回擦るだけで白いジュースが飛び出してきそう。

「さあ、ご主人様……このままこちに飛ばして、ねっ……んっ！ あは、たっくさん飛びましたねご主人様」

跳ねる肉棒は狙いが定まらず、白濁液を周囲にまき散らしている。私は自分の顔に掛かったその白濁液を指ですくい、ぺろりと口に含む。苦みのある、私の大好きな味が口に広がっていく。

「美味しいですご主人様……ん、ご主人様、私のは美味しいですか？」

「うん、とつても……美味しいよ。おね……メイドのいやらしい……えつと、ラブジュースが、どんどん溢れてくるよ」

慣れない言葉遣いと興奮とで嘔み気味になりながらも、誠はジュルジュルと私のジュースを啜すすりながら答えている。ふふ、懸命なその姿がまた可愛らしいわね。

「んっ、ご主人様……も、もう、そろそろ……」

言うなり、私は腰を浮かせた。もう待てない。ずっと嘗め回されていたから、膣の奥がうずいてうずいて仕方ないの。私は急いで腰の位置を顔から彼の腰へと移動させ、また天に向けいきり起ってきた彼の息子を荒々しく掴む。そして慣れた手つきで自分の陰部へと

向けさせ、すんなりと腰を下ろした。

「んんっ！ なに、またこんなに大きくさせてたの……本当にいやらしいんだから……ご主人様は」

罵りながら、まだ忘れていなかったシチュエーションを付け加える。そして私は前後に腰を動かしながら身体を上下に揺り動かす。

「ん、はっ、はぁ……なんか、いつもより、大きくない？ ん、んっ！」

そういう私も、いつも以上に膣の締め付けをキツくしている。小さな身体同様に膣も小さいが、しかしそれでも彼の息子をすんなりと受け入れている。それだけずっと濡らし続けていたってことかな……だってもう、待てなかったんだもの。

「ね、ご主人様も、動いて、下から、突き上げ、て」

誠が私に合わせ腰を下から打ちつけてくる。いつも以上に私たちの結合部からはグチュグチュといやらしい音が聞こえて来た。止めどなくあふれ出る私の愛液が、突かれる度に周囲へ飛び散っているのが見える。

「ひあっ、ん、なん、か、ちがう、いつもと、んっ！ い、いいかも……どう、きもち、いいの？ ごしゅじん、さま、は」

手を誠のお腹につきながら、声を途切れ途切れにさせながら尋ねた。誠は答える代わりに、より激しく腰を振る。

「ちよっ、も、とつぜ、んっ！ や、ちよっ、いつも、ん、ちがっ、てっ、なん、かつ、んっ！ やっ、あっ、あん、あはあ、んっ、んん！」

気持ちよすぎて、あまりに気持ちよすぎて、手で自分を支えられなくなってきた。私は誠の上へと倒れ込む……しかしそれでも、私の腰は止まらない。当然誠のも。

誠が小さな私の身体をギュッと抱きしめる。私は誠の胸に顔を埋め、彼の乳首に唇を這わせ舐め始めた。ふふ、優しく抱きしめたって、攻めるのは止めないんだから。姉の攻めに気を良くしたのか、負けられないと思ったのか、誠はベッドのきしみをより大きくさせてきた。

「んっ、チュ、ん、んん！ クチュ……ん、んあ！ やっ、ん、チュパ……」

……本音を言えば、いつもより感じているのをごまかしたかった。誠にここまで感じている自分が急に恥ずかしくなあって、誠の乳首を舐めることでごまかしたかった。でも限界ってあるわね……声が漏れちゃう。感じすぎて……ああ、誠にばれちゃったかな……チラリと上、誠の顔をのぞき見ると、やっぱり……ニコニコしてこっちを見てる。もう、そんな顔で見ないでよ……可愛い誠に、可愛い姉って思われちゃったかな。それはそれで……でもやっぱり……ん、もう、気持ちよすぎて、考えがまとまらない！

「んっ、も、ちよ、ダメ、んっ、チュ、ん、んっ！ いっ、ちや、め、ダメ、んは、ん、んはぁあー！」

自分から先に逝くなんて、言えない。出来ない。姉のプライドが、モー・シヨボーとしてのプライドがそれを許さない。膣に力を込め、子宮口すら攻めの道具にし、誠の肉棒を攻めに攻めまくる。あ、ダメ……子宮口にガンガンぶつかってかえって感じちゃう……でも、でも、誠だつてそろそろ……。

「そろそろ、いく、いくから……」

「え、ええ、いって、いき、いきなさい、よ……いっ、いっしょに、いって、あげる、か

ら、んっ、ね、ほら、はや、くっ！ んっ、あ、ああっ！」

誠から根を上げるのを聞き届け、私はそれを待ってたとばかり堰を切り逝くことを促す。ズブズブと激しく腰が動き、ぐぐつと膣が内側から圧迫される。もうすぐ、ほら、もうすぐ……来る！

「はやく、はやく！ ほら、ちよっ、いつ、いつて、ん、あっ！ きた、しろいの、わた、わたしも、あっ、ん、んん！」

どうにかプライドを死守した私は、まるで突くように勢いよく飛び出す白濁液を子宮で受け止める。その美味しいジューズを根本から吸い上げようと更に膣をギュツと締め付けた。誠は息を荒げながらまだ私を抱きしめていた。本当はこのまま余韻を楽しみたかったけど……私は半身を起こし僕の腕をほどいてしまう。

「ご主人様にしては上出来だったんじゃない？ 気持ちよかったわよ」

ちよっと強がり。今まで色んな男達を相手に、いかに気持ちよくなれるか、いかに長持ちさせるかなんてあれこれ手を尽くしてきたのに……こうもアツサリ、我が弟にそれらの問題を解決されちゃったんだもん。ちよっと悔しいじゃない？ なんてだろうね……正直テクニクとか、まだまだなっていないのに……って、もし誠がこれ以上テクニクを身につけたら……私はゾクツと背筋を振るわせた。これ以上気持ちよくなれる……その興奮と幸福に、胸を高鳴らせてしまう。

「ところでご主人様？」

なら今からでも、そう、まだまだ足りない……私は腰を回しくチュクチュクと音を鳴らせた。私達はまだ繋がったままだったから。

「次はアナルなどいかがですか？」

私の提案に少し驚いたようだけど、誠はすぐに頷いた。

「ふふ、ご主人様のエッチ。ではこの次はアナルで……」

そう言いながら、私の腰は止まらない。うん、本当にアナルを攻めて欲しかったんだけど……なんだか腰を動かしたら、こっちもまた欲しくなっちゃった。

「ん、もう堅くなってる……本当にご主人様は、スケべなんですね」

せっかくだからアナルはこれの次。さて、続けるにしてもこのまま同じ体位は面白くないなあ……と思っていたところ、誠が半身を起こし私を抱きしめてきた。

「ご主人様？」

「舐め……るんだ、この淫乱メイドめ。ボクの乳首を舐める」

「ふふ、この変態主人。たっぷりと舐めてあげるわ」

もう既に「主人とメイド」って感じではなくなってるけど、この遊びはとりあえず続けてみる。たぶん私がここまで感じるのは、このちよっに変えた趣向のせいじゃない。誠と身体を何度も重ねてきた、その結果だと思う。なんとなく、そう思った。姉と弟。妖怪と人間。色々考えると、背徳的な関係にある私達。それでもこうして抱きしめ合って、お互い感じて、気持ちよくなってる……もっともっと、深く深く、繋がっていききたい。そう思い始めている自分に戸惑いつつも、私は誠を求めていく。

「んっ、ご主人様……気持ちいい？ 良いなら声を出して」

「きっ、気持ちいいよ……もっと、もっと舐めて、腰をもっと、動かして……」

「うふふ……ええ、ご主人様がお望みなら。たっぷり、可愛がってあげる」

変態っていえばそれに当てはまるのかな。ふふ、変態でも良いじゃない。気持ちいいんだから……それでいいじゃない。

「ほら、聞こえる？ ジュブジュブって、私達の繋がってるところから……いやらしい音がしてる」

「うん、聞こえるよ……いやらしいね、とつても、いやらしいよ……」

私の頭を撫でながら、誠が息を荒げながら答えてる。可愛いなあ……本当はキスしてあげたいところだけど、私からは無理だ。ちよつとこの幼女体型でいることが切ない。

「顔を上げて、姉さん……んっ」

「誠……ん、キスのおねだり？ しょうがないご主人様……」

誠から求めてくれた。気持ちを通じたみたいでなんか嬉しい……私は誠の首に精一杯手を回し、唇を重ねる。まだちよつと残っていた私の愛液の味がする。構わず私は小さな舌を伸ばしながら、愛液ごと誠の唾液を吸い取る。しょっぱいのが甘いのが混じり合った、複雑な味。まるで私達の関係のように、複雑な味。

「誠お……ん、クチュ、もつと舌を出して、そう……ん、絡めるの、そう、上手よ……ん、クチュ……ん、うん、たまに吸ったりして、そう、ん……チュ、んっ……」

キスの指導なんて、初歩中の初歩なだけだな……それも腰を振りながらなんて。こんなシチュエーションに、私も誠も、かなり興奮している。内側からの圧迫がきつくなってきたのが判るし、膣の締め付けもきつくなっているのを自覚している。

「ほら、誠……ご主人様……淫乱メイドに、もつとお仕置きして……」

「うん、ほら、こう、こうか……腰、腰が、いやらしいよ……」
前後左右にくる腰。かき回される膣内。締め付けられる肉棒。もう、二人とも限界がそこまで来てる……。

「おねえ、ちゃん……いき、そう……」

「いいわ、いいわよ、そのまま、だしちやいなさい……ね、ほら、おねえちゃんも、いくから、ね、ね、まことお……」

見つめ合って、またキス。止まらない互いの腰。上と下からクチュクチュグチュグチュグ湿った音。むわつと咽せそうになるような男と女の匂い。とろけ合いそうな二人が、頂点へと上り詰める。

「いく、だすよ、おねえちゃん……ん、ぐっ！」

「いい、だして、またビュツて、して、おねえちゃんも、んっ！ あっ……きた、んっ！」
子宮に注ぎ込まれる二度目の精子。それを感じながら、またギユツと締まる膣。腰は止まり、唇は張り付き合い、言葉が塞がれる。抱きしめ合う二人が一緒になってビクビクと震えている。

「……ぷはぁ……もう、強く抱きすぎ」

「ゴメンお姉ちゃん……なんか嬉しくて、また一緒に逝けて……」

照れる弟が可愛すぎる。もう、あまりにも可愛すぎるから、繋がったまままた腰が動いちゃう。

「ちよ、お姉ちゃん……また？」

もう少し余韻を楽しみたかったのかな。んー、本当は私もそうなんだけど……なんか嬉しくなっちゃって、腰が止まらないのよね。

「んー、このまましても良いし、次こそアナルでもいいけど……どっちがいい？」
「いや、あの……少し休ませて欲しいかも……」

「もー、こんなに盛り上がりすぎてきたのに情け無いわねえ……テクニクも大事だけど、ちよつと体力方面を鍛えないとダメかしら？」

「あら……そう」

私は腰を持ち上げ、肉棒を私の中から引き抜く。ゴポツと、栓をされていた膣から大量の白濁液が同じく大量の愛液と混じり合いながら私の股を伝わり流れ落ちていく。

「お姉ちゃんのこは、もうこんなになってるのになあ……」

頭と肩はベッドに倒し、膝を立て少し足を開き誠へお尻を向ける。両手は後ろに回し、尻肉を自分でつかみぐつと開く。奥ではヒクヒクさせた菊座が見えているはず。

「入れたくないの？」

「……入りたいです」

もう、可愛い返事。体力の限界を感じながらも性欲が前に出てる。若さかなあ……そんな誠は私の尻肉にてをあてがい、その間へとつくに硬くしている肉棒を差し入れてくる。

「大丈夫よ、とつくに準備できてるからそのまま……んっ！きたあ……」

「くっ、お姉ちゃんの中……凄い」

入るときには肛門を開き、奥へ奥へと誘う。根本まで入ってからは肛門をきつく締め、直腸で誠をうにうにと揉みほぐす。誠が腰を引こうとすればまた肛門をゆるめ、直腸で肉棒を舐めるように押し出す。

「凄いやお姉ちゃん……気持ちよすぎる」

「ふふ、もう他の女なんかじゃ満足できないでしょ」

その前に、誠は他の女を知らないんだけどね。そしてこれから知ることもないだろうけど。知るような機会なんか与えるもんですか。

最初はゆっくりだった腰の動きも、徐々に早くなる。それでも私のアナルは誠の肉棒を同じように迎え入れ、きつく歓迎し、優しく送り出す。

「誠は、ん、お姉ちゃんの、前と、後ろ……どっちが、好き？」

「はあ、うん、どっちも……だって、どっちも、気持ちいい、くっ、どっちも、お姉ちゃん、だし……」

ちよつと優柔不断な答えだけど、ふふ、まあ許してあげる。

「誠は、お姉ちゃんのこと、好き？」

「好き、大好き、だよ……お姉ちゃん、好き、好きだ……んっ、お姉ちゃん、お姉ちゃん！」

「はあ、んっ、誠……私も、私も……」

好き？

その言葉に戸惑って、私は声に出来なかった。私が……誠を？ 気に入っているのは確か。本当に可愛いと思う。だけど……もー・シヨボーの私が、人を好きになるってこと、あるの？ これが……そうなの？

「好きだ、お姉ちゃん、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ！」

「誠、まこと……いい、もつと強く、んっ！」

結論を出す勇気がなかった。それよりも、私はもつと誠を感じていたい。もつと、もつと深く、誠を感じたい。

「おねえちゃん、またいく、でる、でるよ！」

「うん、きて、まこと、まこと……おねえちゃんの、なか、なかに、おくまで、いっぱい、いっぱい！」

激しくなる誠の腰と、気持ち。私はそれを全身で受け止める。実直な彼自身が、私を激しき突き立てる。

「でるよ、いく、いく……んっ、くっ！」

「あっ、きてる、でてる……おくまでえ、ドクドク、いつてる……おなかにい、ちよくせつ……ん、んっ！」

直接誠のミルクを味わいながら、私はギョツとアナルを締め付け最後まで搾り取るうとする。三度目の割に、たっぷりと注いでくれた。

「ふう……まことお、たっぷり出たねえ……」

「うん……お姉ちゃんの中、気持ちいいから……」

そろそろ体力の限界か、息がだいぶ荒い。これで打ち止めとばかりに、誠が私から肉棒を抜き取るうとする。

「……あの、お姉ちゃん……」

「んー、もうちよつとミルク欲しいなあ」

逃がさない。肉棒を抜かさないようぐつと肛門に力を込める。

「あの、流石にそろそろ……」

「いいわよお、誠は休んでなさいよ。後はお姉ちゃんが……ふふ、ご主人様の粗相を後始末させていただきます」

忘れていた演技を再開しながら、私はようやく肉棒を解放してあげた。しかし私はそこで手早く身体を回し、抜かれたばかりの肉棒を掴み、すぐさま口へと導く。

「メイドのアナルで汚れたご主人様を、キレイにしますね」

そもそも人間と違い私のアナルは排泄物なんか出てこないし、汚くはないんだけどね。それでも私の愛液と誠の精液でベトベトになってるし、汚れてるのは確か。私はそれをピチャピチャと丁寧に舐め綺麗にしていく。

「あの……そんなことされたら……」

「されたら、なに？ あらあら、また大きくなっちゃって……ふふ、イケナイご主人様ですわねえ」

そろそろ大きくするだけで股間が痛くなってきたかな。ちよつと可愛そうかな……とは思うけど、美味しいから止められない。

美味しい？ そういえば……私は男のこれを本気で美味しいなんて思ったことなかったのにな……でも誠のは美味しい。本気で美味しいと思う。この味は止められない。で私は、あえて誠に問う。

「それとも、ここで止めますか？」

決定権を誠に譲ってあげた。返ってくる答えを判っていないながら。

「……こんなところで止められたら……その、切ないよ……」

「ふふ、ご主人様のスケベ」

そんなところが可愛い。

「ん、チュ……ん、クチュ、チュ、んん……チュパ、クチュ、んチュ……」

「うっ、お姉ちゃん……はぁ、ん……」

私の頭を撫でながら、ちよつと苦しそうに、でも気持ちよさそうな顔で私を見下ろしている。私はそんな誠を、彼の大切で大好きなものをしゃぶりながら見上げた。

「お姉ちゃん……エロい、その顔エロいよ……」

「ん、ふふ……チュ、気持ちよさそうな顔しちゃって、ん、クチュ……エロいメイドは大好きですか？ んっ……チュ」

息を荒げながらコクコクと首を振る。私はその姿を見て口元を軽くつり上げた。大きくなった肉棒の根本を片手で軽く掴み、唇と一緒にしごきあげる。もう片方の手で陰囊を優しく包み軽くもみ上げる。舌は鈴口を突いたり包んだり忙しい。

「お姉ちゃん……もう……」

「ん、出して、このまま……エロいメイドの口に、クチュ、ぶちまけて……」

手を誠の腰に当て、激しく顔を前後させる。舌は亀頭に絡ませ、唇で陰茎を激しく擦る。

「出すよ、お姉ちゃん……ん！」

「んっ！ ん……ゴク……んっ、ぷはぁ……流石にちよつと少ないけど、まだまだ出るじゃない」

喉を鳴らしながら誠を味わい。唾液と精液が絡みついた舌でペロリと唇を嘗め回す。もちろん、見せつけるために。

「うっ……」

「この仕草、このエロさに、誠が反応を示すが、流石にもう肉棒にまで反応はない。」

「とりあえず、指をくわえて見上げてみる。幼女ならではのなおねだり。」

「無理です……ホント勘弁してください」

ちっ、体力無いなあもう……。

「天道寺さんが言っただけ……」

ベッドの上で、私は誠に抱かれながら横になっていた。この、折角の時間にあいつの名前が出てくるのはちよつと面白くないんだけど、私は黙って誠の話に耳を傾ける。

「モー・ショボーの話……愛を知らずに亡くなった少女がモー・ショボーになるって……」

「誠の話は当然、私が彼以上に良く知っている話。だって私の出生に関わる話だから。」

私達モー・ショボーは、愛を知らずに死んだ少女が変化した妖怪だって言われている。一説には……私達が鳥になるのは、鳥が「魂の象徴」だかららしい。これはモンゴルだけでなく、エジプトのラーなど、各国で見受けられるんだって。そのあたりの話は正直、どうでもいいんだけどさ。結果として私が生まれ、こうして生きてる。それだけのことだから。

「でね……少女が知らない「愛」っていうのは……その……「性愛」のことなんだって言うんだ……」

そう……これも知っている。私が知らない愛は、愛情とか恋愛とか、そっちの事ではなく、性愛……つまりさつきまで誠としていた性交の快樂ってことらしい。それを知らないから、モー・ショボーは男を誘惑し快樂ではなく脳髓を求めるのだ……でもそれだった

ら、何故私は快樂を求めんの？ 脳髓も好きだけど……そこが疑問で、私は^{フェアリードクター}妖精学者の話をあまり真剣に考えたことがなかった。でも誠は、そこが気になっていたらしい。

「天道寺さんはね……お姉ちゃんが、愛っていう感情自体に変なプレッシャーを感じすぎてるって気にしてたよ」

まったくアイツは……余計なことを誠に吹き込まなくても……そうよ、だって快樂を求めている私に、他に知らない、感じられない愛ってなに？ 実際、今まで愛なんて……判らなかつた……今まで……。

「お姉ちゃん……ボク、お姉ちゃんのこと大好きだよ」

じつと私を見つめ、誠が真剣な顔で告白してくる。うわ……ちょっと止めてよ。まとも
に誠の顔が見られないじゃない……。

「お姉ちゃんは、ボクのこと……どう思ってるの？」

もー……はあ……頬が火照ってるのが自分でも判る。そして……そうね、もう、へんに意地を張るのは止めた方が良いわね。なんか上手くあの^{天道寺}油豚に踊らされてるって気もして悔しいんだけど……そこももう、気にしちゃダメなんだろうな。

「すっ……好きよ。私は誠が、弟が大好きなブラコンよ！」

もー、こんな顔見せられない！ 私は誠の胸元に自分の顔を埋め隠した。はあ、ブラコンか……誠を本当の弟って認めた訳じゃないけど……というか、認めない方が色々世間的には無難っていうか……あーもー、そういうことはいいから、もうね、この恥ずかしい状況をなんとかして！ 絶対、絶対誠は今ニヤニヤしてるに決まってる！ 私の髪を優しく撫でながら、誠が口を開く。

「ありがとっ、お姉ちゃん……大好きだよ」

本当に素直な子……素直すぎるわ。可愛すぎ。そう、可愛すぎるのよ。ホント、本当に……愛してる！

「でも誠……もっとお姉ちゃんを本気にさせたかったら……」

私は顔を離し、じつと誠を見つめて言っちゃった。

「もつと体力付けて、技も磨いて、お姉ちゃんを気絶させる勢いでがんばれるようになりなさい」

「ちよっ……それは……」

「あら、お姉ちゃんのこと嫌い？」

「……好きです、はい、だからがんばります……」

よろしい。素直な子は可愛いわ。そんな子に、お姉ちゃんからのご褒美。私は誠の唇に自分の唇を押し当て、舌を入れ、ちよつと長めのフレンチキスをプレゼント。

「……この程度じゃ回復はしないか」

「いや、もう今日は勘弁してください」

クスクスと笑い合い、もう一度キス。気持ちを届けるキス。やっと素直になれた私からの、愛を届けるキス。

「好きよ、誠」

愛を知ったもー・シヨボーは、どうなるんだろう？ 成仏とかしちゃうのかな……それはないか。だって未練たらたらだもの。私は誠と、ずっとずっと、一緒にいるんだから。

「死ぬときは一緒に。出来れば腹上死させてあげる」

「……冗談になってないよ、お姉ちゃん」

えー、理想の死に方じゃない？ まっ、とにかくずっと一緒。ずっと幼い私を、ずっと愛してね、誠。